

蕪村の句における漢詩文の影響について

仁 枝 忠

蕪村の句が漢詩文を背景とするものが多いのは誰しも認めるところである。そしてその利用の方法が誠に無礙自在であって、特異のロマンチズムとエキゾチズムを醸し出してゐるものが尠くない。これは蕪村が單なる俳人ではなくて、漢文學に造詣深い文人画家であることに胚胎するものがあると思はれるのである。南画は謝靈運・陶淵明・王維・林和靖などの隱逸高踏的な詩境が慕はれるもので、これが直接に蕪村の俳風に影響したものであらう。彼は芭蕉への復歸を希求しつつも、決して芭蕉と同じ境致を表現したものではなかった。この理由も亦ここにあったのではあるまいか。人生の爲に苦しんで句作するのでなくして、半ばは書齋の中で構想を鍊り、古典の世界を現實の中に導入せんとしたものであった。従つてその句の解釋や鑑賞についても、漢文學の背景を考察しないならば、到底味讀出來ないものが多いのである。これは彼の畫についても言へることである。私は次にその影響の下に成つたと思はれる句と漢詩文とを擧げて見ようと思ふのである。影響というものの中には、明確なる引用、即ち漢詩で謂う所の沿襲・踏襲のみでなく、翻案もあれば換骨奪胎もあり、また馳げながら句作の時に、恐らくは彼の腦裏に映じてゐたと思はれる漢文學を、當時流布していた漢詩文集、または蕪村が讀んでゐたと想像せられ、また確證のある書物の中から取つて、廣く考察してみたいと思ふ。これによつて私は蕪村の價値を減ずるものとは考へない。何故なれば文學者は誰しも先行する文學の影響を受けるものであり、そしてその先行する文學も亦必ず祖述するところがあるからである。しかしまた二つの作品が必ずしも關係がなく、偶然に古人の作に似たもの、即ち機軸を同じくするものの出來ることも否定出來ないことである。この點については、正確には本人に聞く以外には方法がないわけである。従つて私の獨斷や臆測も免れ難いところであり、異論も多いことと思はれるが、尠くとも比較鑑賞には値するものと考へられるものを、廣く擧げたつもりである。

蕪村の句における漢文學の影響についてその傾向を分析してみると、大體次の如く整理出來ると思ふ。やや煩蕪にわたるが、便宜上中國の詩論の用語を借りて、五句ずつ提示する

ことにする。これは蕪村が漢文學に造詣が深かつたために、必ずしも意義なしとしないと考へたからである。

〔1〕 翻案——前行する作品を案として、その趣旨を打翻して裏表に作ることである。例へば梁の王籍の「入若耶溪」の詩の、

鳥啼山更幽。

を宋の王安石が「鍾山」の詩に、

一鳥不鳴山更幽。

としたのは翻案である。また杜甫の「送李二十九弟入蜀」の詩の

憑將百錢卜。飄泊問君平。

より李白が「送友人入蜀」の詩に、

升沈應已定。不必問君平。

を得たのもこれである。さて蕪村の句についてみれば

- 一 貧乏に這つかれけりけさの秋
- 二 橋なくて日暮んとする春の水
- 三 秋風の呉人はしらじふぐと汁
- 四 蛤にたたれぬ鳴や春の暮
- 五 門を出て故人にあひぬ秋のくれ

これらは(一)張説の「蜀道後期」の詩、(二)劉廷芝の「公子行」の詩、(三)蒙求の「張翰適意」、(四)戰國策の蘇代の故事、(五)古辭の「朝出城東門」の詩の翻案である。(本論に詳説する。以下同じ)

〔2〕 換骨奪胎——『詩人玉屑』に『冷齋夜話』を引いて次の如く説明してゐる。「山谷言フ、詩意窮リナクシテ、人ノオニ限リ有リ。限リ有ルノオヲ以テ、窮リナキノ意ヲ追フ。淵明、少陵ト雖モ工ヲ得ザルナリ。其ノ意ヲ易ヘズシテ其ノ語ヲ造ル。之ヲ換骨ノ法ト謂フ。其ノ意ヲ規摹シテ之ヲ形容スル、之ヲ奪胎ノ法ト謂フ」と説明してゐる。即ち換骨の法とは古人の作の意義を模し、或は同じ内容を述べるのに異つた語句や表現を用ゐるものである。奪胎の法とは意の異なるものを類似した形式により表現し、著想を新たなるが如く見せかけるものを言ふのである。『捫蝨新話』に「文章ハ古人ノ一言一句ヲ踏襲スルヲ要セズト雖モ、然モ自ラ奪胎換骨ノ法有リ。所謂靈丹ノ一粒、鐵ニ點ジテ金ト成スナリ」とある

が、鐵を變じて黄金と成すのがこの理想である。このことは初學者より大家に至るまで、好んで用ひられる法である。例へば『詩林良材』に李白の、

鳥飛不盡暮天碧。

を黃山谷が

白鳥去盡青天回。

に造ったのは換骨の法であるという。また前の王籍の「鳥啼山更幽」を、杜甫が「題張氏隱居」の詩に、

伐木丁丁山更幽。

としたのもこれである。

杜甫の「寄司馬山人十二韻」の、

髮少何勞白。顏裏肯更紅。

を鄭谷が

裏鬢霜供白。愁顏酒借紅。

に作り、白居易は「醉中對紅葉」に、

醉貌如霜葉。雖紅不是春。

となし、更に蘇東坡は「縱筆三首」の第一首に、

兒童誤喜朱顏在。一笑那知是酒紅。

を得たのなどは奪胎の法である。この換骨奪胎の法は最も好んで用ひられる法であるから、更に例を挙げると、唐の雍陶の「過南隣華園」に、

春風堪賞還堪恨。纔見開花又落花。

とあるが、以下の作品はそれぞれ前作の換骨奪胎である。宋の范成大の「晚步西園」

吹開紅紫還吹落。一種東風兩樣心。

宋の陳元信の「松棚」

清陰堪愛還堪恨。遮却斜陽礙月明。

我が後水尾天皇の御製「窓前栽竹」

夏宜急雨冬宜雪。也恐清陰礙月明。

頼三樹三郎の「和春簾雨窓」

催花雨是落花雨。一樣檐聲前後情。

これらは決して後作が前作に劣るものではない。ただ注意すべきことは、巧緻にして、典據が露見しないやうに心掛けることが肝要である。しかし俳句の場合は、寧ろ典據を少しく露呈して、その背景の上に句を鑑賞せしめることも面白いことである。次の「閣に座して」などはその例であり、それが詩の原典のみならず、嵯峨天皇と小野篁の逸話も思い出されて面白いのである。

一 遅き日のつもりて遠きむかしかな

二 閣に座して遠き蛙をきく夜哉

三 ほととぎす平安城を筋違に

四 青梅に眉あつめたる美人哉

五 瓜小家の月にやおはす隱君子

これらは(一)杜審言の「渡湘江」の詩、(二)白居易の「春江」の詩、(三)蘇東坡の「後赤壁賦」、(四)蒙求の「西施捧心」、(五)漢の邵平の故事を換骨奪胎したものである。

〔3〕點化——點とは『爾雅』の釋器に、「減謂之點」とある。注に「以筆減字爲點」とある。即ち前人の作品の文字或は形式を取り、舊來の姿を抹消訂正して、別に一新機軸を出し、却って前人の作より優れたるものを得ることを謂ふのである。例へば白居易の「食筍」に

且食勿踟躕。南風吹作竹。

を黃庭堅が「從斌老乞苦筍」に、

煩君更致蒼玉束。明日風雨皆成竹。

に作ってゐるのがこれである。また李嘉祐の

水田飛白鷺。夏木嘯黃鸝。

を取って王維が、「漠漠」「陰陰」の字を句の頭に添へて七言の句にしたなどもこれである。(但し李嘉祐は中唐の人にして、王維より後の人なれば、點化の説は當らないとも言ふ。)我が大江千里・春道列樹の歌人の名に、「月」「山」を下に附して、

大江千里月。春道列樹山。

としたなどは興味ある點化であらう。蕪村の句について見ると、

一 さくら狩美人の腹を減却す

二 畑うちや法三章の札のもと

三 炉塞で南阮の風呂に入身哉

四 耳目肺腸ここに玉巻くばせを庵

五 半日の閑を覆やせみの聲

これらは(一)杜甫の「曲江」の詩、(二)漢の高祖の故事、(三)晋の阮咸の故事、(四)司馬温公の「獨樂園記」、(五)李涉の「題鶴林寺僧舍」の詩の點化と云ふことが出来るであらう。この場合は特に俳諧の諧謔的素材として取扱はれてゐる例が多いことに意注を要するであらう。例へば、

ところてん逆しまに銀河三千尺

廣庭のぼたんや天の一方に

川狩や歸去來といふ聲す也

などはこれであらう。

〔4〕踏襲・沿襲——前人の作の詩意を取り、これを自らの作として出すことである。これは剽竊ではないが、巧妙でない限り作品としての價値の落ちることは當然である。『詩人玉屑』卷八の「誠齋論沿襲」の項に、作者は述ぶる者に及ばずと論じてゐるのはこの意である。しかし具體的作品についてみる時には、總て後の作が劣ってゐるとのみは云ひ難

く、同じ『詩人玉屑』にも『隱居詩話』を引いて、述ぶる者は作る者より工なりとも論じてあるのである。例へば杜甫の「蜀相」の

映階碧草自春色。隔葉黃鸝空好音。

は梁の何遜の「行孫氏陵」の

山鶯空樹響。壙月白秋暉。

の踏襲である。杜甫の詩は一字と雖も出典があると言はれ、古人の詩句を踏襲して秀句を得たものが多い。李華の「弔古戰場文」に

其存其沒。家莫聞知。人或言。將信將疑。娟娟心目。寢寐見之。

とあるのを陳陶は「隴西行」に

可憐無定河邊骨。猶是春閨夢裏人。

と踏襲してゐるが、『隱居詩話』には「蓋シ前ヨリ工ナリ」と評してゐる。また王建の「行宮」の

寥落古行宮。宮花寂寞紅。白頭宮女在。閑坐說元宗。

を我が藤井竹外が踏襲して、次の「遊芳野」の詩を得たのは有名である。これは五言を七言に改めた感のするものである。王建の作は誠に秀抜のものであるが、竹外の作も劣るものではない。

古陵松柏吼天飈。山寺尋春春寂寥。眉雪老僧時較帚。落花深處說南朝。

さて蕪村の句について見よう。

- 一 梅が香に夕暮早き麓かな
- 二 君ゆくや柳みどりに道速し
- 三 歸る雁田ごとの月の曇る夜に
- 四 二もとの梅に遅速を愛す哉
- 五 帛を裂琵琶の流れや秋の聲

これらは(一)林和靖の「山園小梅」の詩、(二)王維の「送元二使安西」の詩、(三)錢起の「歸雁」の詩、(四)和漢朗詠集に見へる「早春」の詩、(五)白居易の「琵琶行」の詩の踏襲であるが、殊に前三句はその原典を感ぜしめないほど巧妙である。

〔5〕 特別の雰囲気、或はエキゾチズムを醸すために、漢文學の故事などを攝取したものもある。従ってその語そのものの中には深い意味はないが、雰囲気として句意を支へてゐるものが多い。

- 一 指南車を胡地に引去ル霞哉
- 二 易水にねぶか流るゝ寒さかな
- 三 邯鄲の市に鰻見る雪の朝
- 四 玉鬣漂母が鍋をみだれうつ
- 五 ぼうふりの水や長沙の裏借家

これらは(一)黄帝の造ったと云ふ指南車、(二)荆軻が燕の太子丹に別れた易水、(三)盧生が一次の夢を見た邯鄲、(四)韓信に食を与えた漂母、(五)洞庭湖南の卑濕の地長沙が詠み込まれてゐる。これがロマンチズムやエキゾチズムを生ぜしめる上に、非常な効果を有してゐるのである。

〔6〕 以上の外に、何れの漢詩文であるかは、具體的には指摘出来ないが、一見して漢文學の影響を感得せしめるもの、即ち漢文訓讀調のもの、或はその気分を出すことを期待したものも多い。

白梅や墨芳しき鴻鷗館

霜百里舟中に我月を領す

蟻王宮朱門を開く牡丹哉

月光西にわたれば花影東に歩むかな

鐘老聲饑て鼠糞を食みこぼす

これらは典據は考へられないでもないが、それよりも漢文訓讀調による効果を期待したものであり、中には芭蕉の延寶・天和期の作を想はしめるものがある。また

一行の鴈や端山に月を印す

鬼貫や新酒の中の貧に處ス

新そばや根來の椀に盛來ル

ゆく春や逡巡として遅ざくら

冬籠燈火風の眼を射る

閻王の口や牡丹を吐んとす

これらの圈点を施したところなどは、全く漢文訓讀の語法を取り入れたものであり、「月を印す」の語は蕪村の創作で、私の管見では漢詩文にこの用例を知らない。「貧に處ス」「盛來ル」は、漢文送り假名の片假名を用ひてゐるのであって、芭蕉も蕉風開眼期には意識して好んで用ひた例でもあって、蕪村も恐らく意識して用ひたものであらうと思はれるのである。これらは蕪村の漢文學の教養から來た自然の傾向であつたと想像せられるのである。

以上蕪村の漢詩文の影響は、大略右の六種類に分析出来ると思はれるがその攝取の方法は複雑多彩で、巧緻を極めたものも多いのである。なほ翠微・片雲・五更・三徑などの詩語から、行人絶ゆ・月天心・耳目肺腸などの詩中の成語も、その具體的な出典を愛讀書中に探してみた。また前書きについても、句と不可分の關係にあると云ふ意味で、句と同様に取り扱って、その典據も考察した。

さて文學作品とそれに先行する文學との關係を考へることは、解釋と鑑賞上において重要な手がかりと、微妙な気分を感ぜしめることは勿論であるが、またその作者の創作に對する態度を推測せしめるものであって、特に俳句の如き短詩

型については見逃せないところである。

ほととぎす平安城を筋違に

この句はこれだけで何の疑問もなく理解出来るのであるが、「後赤壁賦」の

人影在地。仰見明月。……月白風清。……反而登舟。放乎中流。聽其所止而休焉。時夜將半。四顧寂寥。適有孤鶴。橫江東來。翹如車輪。玄裳縞衣。憂然長鳴。掠予舟而西也。

を踏んだものではあるまいか。然らばこの句は四顧寂寥たる平安城の月明の夜であること、孤鶴に代へるに杜鵑を以てしたこと、即ち杜鵑は一羽で、その聲は静寂を破ったものであることなどを想像せしめるものである。ここに鑑賞の問題があると思ふ。芭蕉にしる、蕪村にしる、背景となつてゐる漢詩文は、大概當時有名にして人口に膾炙したものの多いのは、彼の讀書が當時流行した書物と一致してゐることと共に、俳句の庶民性を考へたためであらう。然しまた必ずしも一般に知悉せられたもののみでもないことは、庶民性のみならず、藝術性も忘れなかつたことを意味するであらう。その場合は強ち背景を知らなくても理解し得るようである。勿論江戸時代は漢文學の盛行を見た時代であるから、現代のわれわれの教養とは、自ら異なることを考へなければならない。實にわれわれが想像以上に漢詩文の影響が認められるのである。

さて私は次に蕪村の句の解釋に當つて、漢文學の影響を想像するが故に、二、三の變つた解釋が成立するのではないかと思はれるものを、下に擧げてみようと思ふ。勿論必ずしも自信があるわけではないが、蕪村の作例によつてみて、或は彼の胸中に全くなかつたとも考へられないので、敢て次に示すのである。大方の叱正を期待してのことである。

麥刈て遠山見せよ窓の前

この句は「遠山眉」「遠山黛」の換骨奪胎ではあるまいか。この語は婦人の眉の美しさを形容する語であるが、これを原意に返した用法のように思はれる。『趙飛燕外傳』に

飛燕妹合德卷髮。號新興髻。爲薄眉號遠山眉。施小朱號慵來粧。(圓機活法の麗人門・美人)

とあり、『西京雜記』には

卓文君姣好。眉色如望遠山。臉際若芙蓉。肌膚如凝脂。

(同)と見える。黛とは眉墨である。眉を遠山に譬えた語であるが、この語を取つて却つて元意にして用ひたものであらうと思ふ。蕪村の俳諧的手法である。

蕭條として石に日の入る枯野かな

冬枯れの一帯蕭條たる中に、弱い日射しが大きな石を照し出

してゐる。寂寥たる情景を詠じた句と考へられてゐる。そしてこの背景として班固の「西都賦」の「原野蕭條」、陶淵明の「擬挽歌辭」の「馬爲仰天鳴。風爲自蕭條。」の語句が引合に出されるのであるが、私は本論にも述べるが、次の詩の背景と考へることは如何であらう。

經下邳圯橋懷張子房

李太白

唯見碧水流。曾無黃石公。嘆息此人去。蕭條徐泗空。

子房取履

蒙求

前漢張良字子房。其先韓人。嘗遊下邳圯上。有一老父衣褐。至良所。直墮其履圯下。謂曰。孺子下取履。……孺子見我濟北穀城山下。黃石即我已。遂去不見。旦日視其書。迺太公兵法。良異之。常習誦。後從高帝過濟北。果得黃石。取而寶祠之。

黃石公と張子房の故事は誰しも知るところであり、『蒙永』の外にも『高士傳』『列仙全傳』などの書にも見える。蕪村はこれに基だ興味を引かれたらしく、

題 沓

石公へ五百目もどすとのくれ

嘆息此人去。蕭條徐泗空。

沓おとす音のみ雨の椿かな

の句をものしている。「蕭條徐泗空」の空の字を黃石の石に替へて、これを枯野の石に措き代へたのではあるまいか。即ち張子房が濟北穀城山下を過り、蕭條たる野中に見た黃石、嘗て沓を落して、兵法を授けた老人と、事の變つた寂寥を寓したものと考へられないだらうか。「蕭條」の語の出典は、明かに李白の詩に求むべきであらう。

突とめた鯨や眠る峯の月

有朋堂版の『蕪村全集』の頭注には、

濱には巨鯨眠れるが如く横はり、峯には寒月冴えて漁村の夜は更けて行く。

とある。「突とめた」とあるから、眠る鯨は突き殺されたのであらうが、眠るの語が妥當を缺く感じである。私は敢て次の詩の影響を思ふのである。

採石月贈郭功甫

梅聖俞

採石月下訪謫仙。夜披錦袍坐釣船。醉中愛月江底懸。以手弄月身飄然。不應暴落飢蛟涎。便當騎鯨上青天。

燕思亭

馬子才

李白騎鯨飛上天。江南風月閑多年。

昔謫仙李白が釣船に坐し、酔うて水中の月を捕へんとして水に入り、鯨に乗って青天に上つたと云ふが、その李白を乗せた鯨が、今も山上に照る月の下に、静かに眠つてゐるのを、私は見たの意で、李白は既に上天し、その後の江南の風月の

閑なることの續いてゐるの意を寓したものであるまいか。
「突とめた」は、しかと見たの意であると思ふが、考へ過ぎ
であらうか。上の漢詩二首は共に『古文眞寶』所収である。

鯨と月と相對して用ひた燕村の句に、

既に得し鯨は逖て月ひとつ

がある。漢文學についてみれば杜甫の「秋興八首」に、

織女機絲虛夜月。石鯨鱗甲動秋風。

とあり、また『廣州記』に、

鯨鯢長百丈。大則稱之。雌曰鯢。雄曰鯨。目即明月珠。

死不見眼睛。而噴浪翳於雲日。

と見え、また『古今注』にも目は明月の玉となると云つてゐ
るので、鯨と月とは、日本流に言へば縁語である。ここにも
燕村の聯想があつたのではないかと思はれる。

さて本論として、次に燕村の句と、それに影響したと思は
れる具體的な漢詩文を比較考察して見ようと思ふ。配列の順
序は大略『岩波文庫版』に依つたが、『日本古典文学大系』
の『燕村集』を参考した。多少は前後したものもあり、又後
に見える句（後篇も含めて）を上にならべたものもある。

籬 落

○うぐひすのあちこちとする小家がち

劉長卿の贈西鄴盧小府に、籬落能相近。漁樵偶復同。また
戴叔倫の酬袁太祝長卿に、籬落栽山果。池塘養海鱗。

○鶯の聲遠き日も暮れにけり

○鶯に終日遠し烟の人

蘇味道の在廣聞崔・馬二御史竝登柅臺に・振鶯纔飛日。
遷鶯遠聽聞。（唐詩選）

禁城春色曉蒼々

○青柳や我大君の艸か木か

賈至の早朝大明宮呈兩省僚友に、銀燭朝天紫陌長。禁城
春色曉蒼蒼。千條弱柳垂青瑣。百轉流鶯遶建章。（同）

草 菴

○二もとの梅に遲速を愛す哉

○梅散りてさびしく成しやなぎ哉

保胤の春生逐地形序に、東岸西岸之柳。遲速不同。南枝
北枝之梅。開落已異。（和漢朗詠集の早春）

人 日

○七くさや袴の紐の片むすび

杜甫の人日に、佩劍衝星聊暫拔。匣琴流水自須彈。（杜
律集解。注に佩劍・匣琴は装具とある）

○宿の梅折取るほどになりけり

羅隱の江邊有寄に、狂折野梅山店暖。醉吹村笛酒樓寒。

○しら梅の枯木にもどる月夜哉

杜甫の傷春に、鶯入新年語。花開滿枯枝。

○梅遠近南すべく北すべく

蒙求の楊朱泣岐に淮南子の説林訓を引いて、楊子遠路而
哭之。爲其可以南可以北。（圓機活法の橋道門・道路に
も）

菅丞相の花時天似醉に、煙霞遠近應同戶。桃李淺深似勸
盃。（和漢朗詠集の三月三日）

○やぶ入の夢や小豆の煮ゆるうち

○藥喰盧生を起す小聲哉

李泌の枕中記に、開元十九年。道者呂翁。于邯鄲邸舍
中。值少年盧生。自歎其困。翁操囊中枕授之曰。枕此當
令子榮適如意。生于寐中。娶清河崔氏女。舉尚書侍郎中
書門下平章事。掌大政十年。封趙國公。三十餘年出入中
外。崇盛無比。老乞骸骨不許。卒于官。欠伸而寤。初主
人蒸黃粱爲饌。時尚未熟也。呂翁笑謂曰。人世之事。亦
猶是矣。生曰。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。再拜從
而去。（圓機活法の人事門・夢）

○これきりに徑盡たり芹の中

○桃源のみちの細さよ冬ごもり

蒙求の武陵桃源に、陶潛桃花源記云。晉太元中。武陵人
捕魚。緣溪行。忘路之遠近。……復前行。欲窮其林。
林盡水源。得一山。山有小口。髣髴若有光。便捨船從口
入。初極狹。纔通人。（古文眞寶にも）

春夜聞琴

○瀟湘の雁のなみだやおぼる月

○歸る鴈田ごとの月の曇る夜に

錢起の歸雁に、瀟湘何事等閑回。水碧沙明兩岸苔。二十
五絃彈夜月。不勝清怨却飛來。（三體詩・唐詩選）

○肘白き僧のかり寝や宵の春

白居易の偶眠に、放杯書案上。枕臂火爐前。

○春月や印金堂の木の間より

王昌齡の西宮春怨に、斜抱雲和深見月。朧朧樹色隱昭
陽。（三體詩）

もろこしの詩客は千金の宵ををしみ我朝の哥人はむ
らさきの曙を愛す

○春の夜や宵あげぼのゝ其中に

蘇東坡の春夜に、春宵一刻直千金。花有清香 月有陰。
（聯珠詩格・詩人玉屑）

野 望

○草霞み水に聲なき日ぐれ哉

杜甫の春夜喜雨に、隨風潛入夜。潤物細無聲。（杜律集

解）また劉長卿の吳中別嚴士元に、細雨濕衣看不見。閑花落地聽無聲（禪林句集）また韓退之の桃源圖に、船開棹進一回顧。萬里蒼茫煙水暮。（古文眞寶）また杜律集解の中に野望の詩題が二三ある。

○藥盜む女やは有おぼろ月

淮南子の覽冥訓に、羿請不死之藥于西王母。姮娥竊以奔月。高誘注に、姮娥羿妻。羿請不死之藥於西王母。未及服之。姮娥盜食之。得仙。奔入月中爲月精。（圓機活法の天文門・月の嫦娥奔月にも）

○指南車を胡地に引去ル霞哉

十八史略の黃帝軒轅氏に、蚩尤作亂。其人銅額。能作大霧。軒轅作指南車。與蚩尤戰於涿鹿之野。禽之。

○高麗舟のよらで過ゆく霞かな

菅三品の高天澄遠色に、雙鶴出阜披霧舞。孤帆連水與雲消。（和漢朗詠集の晴）

○橋なくて日暮んとする春の水

○春水や四條五條の橋の下

劉廷芝の公子行に、天津橋下陽春水。天津橋上繁華子。（唐詩選）

西の京にばけもの栖て久しくあれ果たる家有けり今は其さたなくて

○春雨や人住みて煙壁を洩る

杜甫の禹廟に、古屋畫龍蛇。雲氣生虛壁。（杜律集解・唐詩選）

○春雨や身にふる頭巾着たりけり

昭明太子の陶淵明傳に、值其醱熟。取頭上葛巾漉酒。漉畢。還復著之。（陶淵明集）

○はるさめや暮なんとしてけふも有

○くれかぬる日や山鳥のおとしざし

詩經の幽風七月に、春日遲遲。采繁祁祁。また同じく小雅出車に、春日遲遲。卉木萋萋。倉庚喈喈。采繁祁祁。

○春雨やものがたりゆく簑と蓋

蒙求の程孔傾蓋に孔子家語を引いて、孔子之鄰。遭程子於塗。傾蓋而語。終日相親。（圓機活法の器用門・雨傘にも）

琴心挑美人

○妹が垣根さみせん草の花咲ぬ

○蝶や相如が絃の切るゝ時

蒙求の文君當壚に、前漢卓文君。蜀郡臨邛富人卓王孫女。新寡。好音。司馬相如與客至其家。酒酣鼓琴。而以琴心挑之。

○裏門の寺に逢着す蓬かな

張籍の逢賈島に、僧房逢着款花花。山寺吟行日已斜。

（三體詩）

○畑うちや法三章の札のもと

十八史略の西漢太祖高皇帝に、吾當王關中。與父老約。法三章耳。殺人者死。傷人及盜抵罪。餘悉除去秦苛法。秦民大喜。

後人逐前人。百步尙百步。下堤還上堤。欲暮日未暮。

○山鳥の尾をふむ春の入り日哉

杜牧の阿房宮賦に、秦人不暇自哀。而後人哀之。後人哀之而不鑑之。亦使後人而復哀後人。（古文眞寶）

○遅き日のつもりて遠きむかしかな

杜審言の渡湘江に、遅日園林悲昔遊。今春花鳥作邊愁。（唐詩選）

○鳥うつや鳥さへ啼ぬ山かげに

王安石の鍾山に、茅簷相對坐終日。一鳥不鳴山更幽。（聯珠詩格）

○河内路や東風吹送る巫女が袖

陶淵明の歸去來辭に、舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。（古文眞寶）

○閑に坐して遠き蛙をきく夜哉

白居易の春江に、閑閣只聽朝暮鼓。上樓空望往來船。（新撰朗詠集の閑居）

蘇味道の在廣聞崔・馬二御史竝登相臺に、振鷺纔飛日。遷鶯遠聽聞。（唐詩選）

○居直つて孤雲に對す蛙哉

李白の獨坐敬亭山に、衆鳥高飛盡。孤雲獨去閒。相看兩不厭。只有敬亭山。（唐詩選）

○うつゝなきつまみ心の胡蝶哉

莊子の齊物論に、昔者莊周。夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志與。不知周也。俄然覺。則蓬蓬然周也。（圓機活法の人事門・夢にも）

○商人を吼る犬ありもゝの花

蒙求の武陵桃源に、陶潛桃花源記云。……忽逢桃花林。夾岸數百步。中無雜樹。芳華鮮美。落英繽紛。……阡陌交通。雞犬相聞。（古文眞寶）また陶淵明の歸園田居に、榆柳蔭後簷。桃李羅堂前。曖曖遠人村。依依墟里煙。狗吠深巷中。雞鳴桑樹顛。（古文眞寶にも）また劉長卿の過鄭山人所居に、寂寂孤鶯啼杏園。寥寥一犬吠桃源。（三體詩）

風入馬蹄輕

○木の下が蹄のかぜや散さくら

杜甫の房兵曹胡馬に、竹批雙耳峻。風入四蹄輕。(唐詩選) また王維の觀獵に、艸枯鷹眼疾。雪盡馬蹄輕。(同)

○花に暮て我家遠き野道かな

陶淵明の歸去來辭に、問征夫以前路。恨晨光之熹微。乃瞻衡宇。載欣載奔。(古文眞寶) また杜甫の送韋郎司直歸成都に、別筵花欲暮。春日鬢俱蒼。(杜律集解) また杜甫の入喬口に、漠漠舊京遠。遲遲歸路賒。(同) また陳子昂の晚次に、故郷杳無際。日暮且孤征。(唐詩選)

○玉川に高野ゝ花や流れ去

李白の山中答俗人に、桃花流水杳然去。別有天地非人間。(古文眞寶)

○花を踏し草履も見えて朝寝哉

白居易の春夜與盧回周諒花陽觀同居に、背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。(和漢朗詠集の春夜) また蘇子瞻の月夜與客飲酒杏花下に、杏花飛簾散餘花。明月入戶尋幽人。蹇衣步月踏花影。炯如流水涵青蘋。(古文眞寶・圓機活法の天文門・歩月) 孟浩然的春曉に、春眠不覺曉。處處聞啼鳥。夜來風雨聲。花落知多少。(唐詩選)

○ねぶたさの春は御室の花よりぞ

孟浩然的春曉 (前出)

一片花飛滅却春

○さくら狩美人の腹を滅却す

杜甫の曲江に、一片花飛滅却春。風飄萬點正愁人。(杜律集解)

○開帳の錦たれたり春の夕

謝觀の春曉鶯賦に、誰家碧樹鶯啼而羅幕猶垂。幾處草堂夢覺而珠簾未卷。(和漢朗詠集の鶯) また章孝標の讀韓侍郎及第詩に、錦帳曉開雲母殿。白珠秋瀉水精盤。(同じく文詞)

○梨の花月に書ミよむ女あり

○梨の園に人イめりおぼろ月

蘇東坡の寒食に、漏聲透入碧牕紗。人靜鞦韆影半斜。沈麝不燒金鴨冷。淡雲籠月照梨香。また晏殊の寓意に、梨花院落溶溶月。柳絮池塘淡淡風。(詩人玉屑)

○菜の花や月は東に日は西に

陶淵明の雜詩に、白日淪西阿。素月出東嶺。遙遙萬里輝。蕩蕩空中景。(古文眞寶)

春夜廬會

○炉塞で南阮の風呂に入身哉

蒙求の仲容青雲に晉書を引いて、阮咸字仲容。……與叔父籍。爲竹林遊。當世譏其所爲。咸與籍居道南。諸阮居道北。北阮富。而南阮貧。七月七日。北阮盛曬衣服。錦

綺祭目。咸以竿挂大布犢鼻於庭。曰未能免俗。

暮 春

○ゆく春や逡巡として遅ざくら

莊子の讓王に、子貢逡巡而有愧色。また同書の秋水に、於是逡巡而卻。

○瘦臙の毛に微風あり更衣

高駢の山亭夏日に、水晶簾動微風起。一架薔薇滿院香。(聯珠詩格)

○ほとゝぎす平安城を筋違に

蘇東坡の後赤壁賦に、時夜將半。適有孤鶴。橫江東來。翹如車輪。玄裳縞衣。憂然長鳴。掠予舟而西也。(古文眞寶)

○廣庭のぼたんや天の一方に

同じく前赤壁賦に、渺渺兮予懷。望美人兮天一方。(同)

○足跡を字にもよまれず閑古鳥

蒙求の蒼頡制文に、許慎曰。蒼頡始視鳥跡之文。造書契。(許慎の説文解字叙に、黃帝之史倉頡。見鳥獸蹠迹之迹。初造書契。百工以乂。萬品以察。)

○むつかしき鳩の禮義やかんこどり

學友抄に、烏有反哺之孝。鳩有三枝之禮。詩經開卷の詩の、關關雎鳩。在河之洲。窈窕淑女。君子好逑。の朱子の集註に、雎鳩水鳥。……生有定偶。而不相亂。偶常竝遊。而不相狎。故毛傳以爲。摯而有別。列女傳以爲。人未嘗見其乘居而匹處者。また同書の國風召南の鵲巢に、維鵲有巢。維鳩居之。之子于歸。百兩御之。の同じく集註に、鳩性不能爲巢。或有居鵲之成巢。とあり、和刻本の同書の頭注に衍義を引いて云ふ、于鳩性拙處見之。知鳩之性拙。則知女子有專靜純一德矣。郭公はもず・ほほじろなどの巢中に産卵して、これらの鳥を假親として孵化せられる。これを鳩の鵲の巢に入って住むのと對して考へたものか。なほ一般に鳩と云へば斑鳩を指すやうであるが、五鳩と云って多くの種類がある。例へば圓機活法の飛禽門の鳩に、叙事按左傳に、五鳩。曰鵲鳩鵲也。曰鵲鳩鷹也。曰鳩鳩鵲也。亦名布穀。曰雎鳩王鳩也。鷓鳩一名斑鳩。一名斑佳。同書の事實の紀鳥爲官に左傳の昭公を引いて五鳩と五官の關係を書して、刻子曰。我高祖少皞摯文立也。鳳鳥適至。故紀於鳥爲師而鳥名。祝鳩氏司徒也。雎鳩氏司馬也。鳩鳩氏司空也。爽鳩氏司寇也。鵲鳩氏司事也。五鳩鳩民者也。

○かんこどり可もなく不可もなくね哉

論語の微子に、子曰。……隱居放言。身中清。廢中糶。

我則異於是。無可無不可。

○かきつばたべたりと鳶のたれてける

白居易の西湖晚歸望孤山寺に、盧橘子低山雨重。楸桐葉
戰水風涼。（和漢朗詠集の花橘）

○蓼の葉を此君と申せ雀酔

蒙求の子猷尋戴に、晉王徽之。字子猷。……嘗寄居空宅
中。便令種竹。或問其故。徽之但嘯詠。指竹曰。何可一
日無此君邪。（圓機活法の竹木門・竹にも）また 篤茂の
修竹冬青序に、晉騎兵參軍王子猷。栽稱此君。唐太子賓
客白樂天。愛爲吾友。（和漢朗詠集の竹）

○三井寺や日は午にせまる若櫻

李紳の憫農に、鋤禾日當午。汗滴禾下土。（古文眞寶）
また李密の陳情表に、日薄西山。（同）また柳宗元の夏
晝偶作に、日午獨覺無餘聲。山童隔竹敲茶臼。（三體詩
・聯珠詩格）

○絶頂の城たのもしき若葉かな

王之涣の涼州詞に、黄河遠上白雲間。一片孤城萬仞山。
（唐詩選）また賈島の暮過山村に、絶頂人來少。高松鶴
不群。（三體詩）

○若葉して水白く麥黄ミたり

杜甫の 醉歌行に、春光淡沲秦東亭。渚蒲芽白水 荇青。
（古文眞寶）また賈至の春思に、草色青青柳色黄。桃花
歷亂李花香。（三體詩）

○蛇を截てわたる谷路の若葉哉

十八史略の西漢太祖高皇帝に、劉季被酒。夜徑澤中。有
大蛇當徑。季拔劍斬之。後人來至蛇所。有老嫗笑曰。吾
子白帝之子也。今者赤帝子斬之。因忽不見。（圓機活法
の走獸門・蛇及び橋道門・道路にも）

○明けやすき夜をかくしてや東山

劉無競の中秋に、夜夜池 邊待月生。却悲此夜 易天明。
（錦繡段）

諸子比枝の僧房に會す余はいたづぎのために此行に
もれぬ

○蚊屋つりて翠微つくらむ家の内

杜甫の秋興に、千家山郭靜朝暉。日日江樓坐翠微。（唐
詩選）また 圓機活法の 地理門・山に、山足曰麓。山穴
曰岫。不及上曰翠微。

大魯・几董など布引瀧見にまかりてかへさ 途中吟

○春や穂麥が中の水車

淮南子の天文訓に、日至于虞淵。是謂高春。至于連石。
是謂下春。注に、連石。西北山。言將欲冥下。象息春。
故曰下春。また詩經の大雅生民に、或春或掄。また張籍

の 羈旅行に、緣岡八澗到田家。主人春禾爲夜食。

かの東臯にのぼれば

○花いばら故郷の路に似たる哉

陶淵明の 歸去來辭に、登東臯以 舒嘯。臨清流而賦詩。
（古文眞寶）

杜甫の 晝夢に、故郷門卷荆棘底。中原君臣豺虎邊。（杜
律集解）

○愁ひつゝ岡にのぼれば花いばら

杜甫の 又送辛員外に、雙峰寂 寂對春臺。萬竹青青照客
杯。細草留連侵坐軟。殘花悵望近人開。（杜律集解）ま
た李白の 登金陵鳳凰臺に、鳳凰臺上鳳凰遊。鳳去臺空江
自流。吳宮花草埋幽徑。晉代衣冠爲古丘。……總爲浮雲
能蔽日。長安不見使人愁。（唐詩選）

○耳目肺腸ここに玉巻ばせを庵

司馬温公の 獨樂園記に、明月時至。清風自來。行無所
牽。止無所枕。耳目肺腸。卷爲己有。踴躍焉。洋洋焉。
（古文眞寶）

○青梅に眉あつめたる美人哉

○青梅や捧心の人垣を間

蒙求の西施捧心に、莊子曰。西施病心。而曠其里。其里
之醜人。見而美之。歸而捧心。而曠其里。彼知美曠。而
不知曠之所以美。（圓機活法の麗人門・美人にも）

○採蓴を諷ふ彦根の僮夫哉

李太白の採蓮曲に、若耶溪傍採蓮女。笑隔荷花共人語。
日照新粧水底明。風飄香袖空中舉。岸上誰家遊冶郎。三
三五五映垂柳。紫駟嘶入落花去。見此躊躇空斷腸。（古
文眞寶）また李白の蘇臺覽古に、舊苑荒臺楊柳新。菱歌
清唱不勝春。（唐詩選）また 漢武帝・羊侃・梁簡文帝に
採蓮曲・採菱曲などがある。

○行々てここに行々夏野かな

古詩に、行行重行行。與君生別離。相去萬餘里。各在天
一涯。（古文眞寶・文選）また 源順の山河千里別序に、
行行重行行。明月峽之曉色不盡。（和漢朗詠集の行旅）

○學問は尻からぬけるほたる哉

荀子の勸學篇に、小人之學也。入乎耳。出乎口。口耳之
間。則四寸耳。曷足以美七尺之軀哉。

○關の戸に水雞のそら音なかりけり

十八史略の春秋戰國の齊に、靖郭君田嬰。……即馳去。
變姓名。夜半至函谷關。關法雞鳴方出客。恐秦王後悔追
之。客有能爲雞鳴者。雞盡鳴。遂發傳。

○蠅いとふ身を古郷に晝寝かな

○細脛に夕風さはる簞

蒙求の陶潛歸去に、潛歎曰。吾不能爲五斗米折腰。拳拳事鄉里小人邪。卽解印綬去縣。乃賦歸去來。後徵著作郎不就。又不營生業。遇酒則飲。嘗言夏月虛間。高臥北窓之下。清風颯至。自謂羲皇上人（圓機活法の時令門・晝寢にも）。

○日を以て數ふる筆の夏書かな

唐子西の古硯銘に、筆之壽以日計。墨之壽以年計。硯之壽以世計。其故何也。其爲體也。（古文眞寶）

丸山主水がちいさき龜を寫したるに贅せよとのぞみければ仕官懸命の地に榮利をもとむよりはしかじ尾を泥中に曳かんには

○錢龜や青砥もしらぬ山清水

莊子の秋水に、莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉。曰。願以竟内累矣。莊子持竿不顧。曰。吾聞楚有神龜。死曰三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。此龜者。寧其死爲留骨而貴乎。寧其生而曳尾於塗中乎。二大夫曰。寧生而曳尾塗中。莊子曰。往矣。吾將曳尾於塗中。（圓機活法の鱗介門・龜にも）

○蓮の香や水をはなるゝ莖二寸

周茂叔の愛蓮説に、予獨愛。蓮之出淤泥而不染。濯清漣而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭亭淨植。可遠觀而不可褻玩焉。（古文眞寶・また圓機活法の百花門・蓮花にも）

○瓜小家の月にやおはす隠君子

圓機活法の百果門・瓜の青門に、漢書の蕭何傳を引いて、邵平老故秦東陵侯也。秦破爲布衣。種瓜長安城東。瓜美。故世號東陵瓜。從邵平始也。また薛能の老圃堂に、邵平瓜地接吾廬。穀雨乾時偶自鋤。注に前の漢書の文を引く。（三體詩）

○半日の閑を覆やせみの聲

李涉の題鶴林寺僧舎に、終日昏昏醉夢間。忽聞春盡強登山。因過竹院逢僧話。又得浮生半日閑。（聯珠詩格・三體詩）

○川狩や歸去來といふ聲す也

陶淵明の歸去來辭に、歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。（古文眞寶）

○楊州の津も見えそめて雲の峯

丁仙芝の渡楊子江に、桂楫中流望。空波兩畔明。林開楊子驛。山出潤州城。（唐詩選）

○雨と成戀はしらじな雲の峯

劉廷芝の公子行に、傾國傾城漢武帝。爲雲爲雨楚襄王。（唐詩選）（宋玉の高唐賦に、楚襄王……怠而晝寢。夢見

一婦人。曰。妾巫山之女也。辭曰。且爲朝雲。暮爲行雨。）

○雲のみね四澤の水の濁てより

○春の水山なき國を流れけり

陶淵明の四時に、春水滿四澤。夏雲多奇峯。（古文眞寶）

○ところてん逆しまに銀河三千尺

李白の廬山瀑布に、日照香爐生紫煙。遙看瀑布掛長川。飛流直下三千尺。疑是銀河落九天。（聯珠詩格・詩人玉屑）

宮 島

○薰風やともしたてかねついつくしま

蘇東坡の足柳公權聯句に、人皆苦炎熱。我愛夏日長。薰風自南來。殿閣生微涼。（此の四句は柳公權の作。古文眞寶。禪林句集）

○貧乏に追つかれけりけさの秋

張説の蜀道後期に、客心爭日月。來往預期程。秋風不相待。先至洛陽城。（唐詩選）

○戀さまざま願の糸も白きより

白居易の七夕に、憶得少年長乞巧。竹竿頭上願絲多。（和漢朗詠集の七夕）

遊行柳のもとにて

○柳散清水溜石處ゝ

○水落て細脛高きかゞし哉

蘇東坡の後赤壁賦に、山高月小。水落石出。曾日月之幾何。而江山不可復識矣。（古文眞寶）

白居易の送令孤尙書赴東都に、歌酒家家花處處。（和漢朗詠集の春興）

○山は暮て野は黄昏の薄哉

荆叔の題慈恩塔に、漢國山河在。秦陵草樹深。暮雲千里色。無處不傷心。（唐詩選）また岑參の送張子尉南海に、海暗三山雨。花明五嶺春。（同）

澗水湛如藍

○朝がほや一輪深き淵のいろ

禪林句集の五言對句に、山花開似錦。澗水湛如藍。（碧巖錄八十二則）

妙義山

○立去ル事一里眉毛に秋の峰寒し

蒙求の交甫解佩に、二女解佩以與。交甫受而懷之。移去數十步。視其懷空無佩。顧二女忽然不見

○朝霧や杭打音丁々たり

詩經の周南兔置に、蕭蕭兔置。椽之丁丁。また同書の小雅伐木に、伐木丁丁。鳥鳴嚶嚶。また杜甫の題張氏隱居

に、春山無伴獨相求。伐木丁丁山更幽。(杜律集解・唐詩選)

○日は斜關屋の鎗にとんぼかな

杜甫の前の詩に、潤道餘寒歷冰雪。石門斜日到林丘。(同)

良夜といふかたもなくして訪來る人もなければ

○中々にひとりあればぞ月を友

蘇東坡の後赤壁賦に、有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良夜何。(古文眞寶)また李白の月下獨酌に、花下一壺酒。獨酌無相親。舉盃邀明月。對影成三人。月既不解飲。影徒隨我身。暫伴月將影。行樂須及春。我歌月徘徊。我舞影凌亂。醒時同交歡。醉後各分散。永結無情遊。相期邈雲漢。(同)

○月天心貧しき町を通りけり

邵康節の清夜吟に、月到天心處。風來水面時。(同)また杜甫の秦州雜詩に、風連西極動。月過北庭寒。(唐詩選・杜律集解)

忠則古墳一樹の松に倚れり

○月今宵松にかへたるやどり哉

盧仝の逢鄭三遊山に、他日期君何處好。寒流石上一株松。(三體詩)

鯉長が酔るや崑崙として玉山のまきに崩れんとするがごとし其倂今なを眼中に在て

○月見ればなみだに碎く千々の玉

蒙求の叔夜玉山に、世説曰。叔夜之爲人。崑崙若孤松之獨立。其醉也。傀俄若玉山將頽。(圓機活法の人品門・人材にも)

蒙求の淵客泣珠に、舊注引博物志云。鮫人從水中出。向人家寄住。積日賣綃。臨去從主人索器。泣而出珠。滿盤以與主人。また左思吳都賦云。泉室潛織而卷綃。淵客慷慨而泣珠。客蓋鮫人也。(文選)

また都良香の紅蘭受露に、凝如漢女顏施粉。滴似鮫人眼泣珠。(和漢朗詠集の蘭)

○庵の月主をとへば芋堀に

賈島の尋隱者不遇に、松下問童子。言師採藥去。只在此山中。雲深不知處。(唐詩選・古文眞寶)

探題雁字

○一行の雁や端山に月を印す

白居易の江樓晚眺寄水部張員外に、風翻白浪花千片。雁點青天字一行。また杜荀鶴の雋陽道中に、四五朶山粧雨色。兩三行雁點雲聲。(和漢朗詠集の雁)また源順の春日眺望に、一行斜雁雲端滅。二月餘花野外飛。(同じく

眺望)また蘇東坡の虚飄飄に、蜃樓百尺橫滄海。雁字一行書絳霄。また菅忠眞の秋山眺望に、雁字一行驚月去。樵歌數曲負嵐還。(新撰朗詠集の眺望)

殘照亭晚望

○鹿ながら山影門に入日哉

諸本の注に百聯抄解を引く。即ち、山影入門推不出。月影舖地掃還生。(この書未見)

○去年より又さびしいぞ秋の暮

岑参の韋員外家花樹歌に、今年花似去年好。去年人到今年老。始知人老不如花。可惜落花君莫掃。(唐詩選)

○山陰や誰呼子鳥引板の音

蒙求の子猷尋戴に、晉王徽子。字子猷。……嘗居山陰。夜雪初霽。月色清朗。四望皎然。獨酌酒。詠左思招隱詩。忽憶戴逵。時逵在剡。便夜乘小舟詣之。また杜甫の卜居に、東行萬里堪乘興。須向山陰上小舟。(杜律集解)

○三徑の十歩に盡て蓼の花

陶淵明の歸去來辭に、三徑就荒。松菊猶存。(古文眞寶)蒙求の武陵桃源に、陶潛桃花源記云。……林盡水源得一山。……復行數十歩。豁然開朗。(同)また吳融の畫山水歌に、不出門庭三五歩。觀盡江山千萬里。(同)また隋書の煬帝紀に、方今宇宙平一。文軌攸同。十歩之内。必有芳草。

○釣上し鮪の巨口玉や吐

蘇東坡の後赤壁賦に、今者薄暮。舉網得魚。巨口細鱗。狀如松江之鱸。(古文眞寶)

○たつ鳴に眠る鳴ありふた法師

蒙求の李陵初句に、蘇武別陵詩曰。雙鳧俱北飛。一鳧獨南翔。子當留斯館。我當歸故郷。

白居易の與元微之書に、唯山僧一兩人。見或坐或眠。

○門前の老婆子薪貪る野分かな

禪林句集の五言對句に、庭前柏樹子。不是祖師心。

○物書に葉うらにめづる芭蕉哉

圓機活法の百草門・芭蕉の供揮洒に、唐僧懷素。貧無紙可書。嘗種芭蕉。以供揮洒。また寶鞏の訪隱者不遇に、欲題名字知相訪。又恐芭蕉不耐秋。注に、古人多喜書芭蕉。如懷素種芭蕉供書。是也。(三體詩)

○唐人よ此花過てのちの月

元稹の十日菊花に、不是花中偏愛菊。此花開後更無花。

(和漢朗詠集の菊)また杜甫の九日に、竹葉於人既無分。菊花從此不須開。(杜律集解)

山家の菊見にまかりけるにあるじの翁紙硯をとうてよほ句もとめければ

○きくの露受けて硯のいのち哉

唐子西の古硯銘に、筆之壽以日計。墨之壽以年計。硯之壽以世計。(古文眞寶) 風俗通に、南陽酈縣有甘谷。谷中水甘美。云其山有大菊。水從山上流下。得其滋液。谷中有三十餘家。悉飲此水。上壽百二三十。其中百餘。下七十八十者。名之大天。

○白菊や呉山の雪を笠の下

閑僧可土の送僧に、笠重呉山雪。鞋香楚地花。(詩人玉屑)

○秋風や酒肆に詩うたふ漁者樵者

杜甫の琴臺に、酒肆人間世。琴臺日暮雲。(杜律集解) 杜甫の閑夜に、夷歌幾處起漁樵。(同) また圓機活法の遊眺・山行の樵歌牧唱に、郟諛數月山行。喜聞樵歌牧唱。洗盡五年塵土腸胃。欣然停驂。臨水久之而去。

○茸狩や頭を擧れば峰の月

李白の靜夜思に、擧頭望山月。低頭思故郷。(唐詩選)

○鬼貫や新酒の中に貧に處ス

蒙求の淵明把菊に南史を引いて、陶潛字淵明。……顏延之在潯陽。與潛情款。後爲始安郡。經過潯。臨去留二萬錢與潛。潛悉送酒家。稍就取酒。嘗九月九日無酒。出宅邊菊叢中坐。久之逢弘送酒至。即便就酌醉而後歸。中庸に、君子素其位而行。不願乎其外。素富貴行乎富貴。素貧賤行乎貧賤。

○冬ごもり燈下に書すとかゝれたり

白居易の山中與元九書因題書後に、今夜封書在何處。廬山菴裏曉燈前。また韓退之の符讀書城南に、新涼入郊墟。燈火稍可親。(古文眞寶)

○虎の尾を踏つゝ裾にふとんかな

易經の履卦に、履虎尾不咥人。亨。六三。眇能視。跛能履。履虎尾咥人。凶。武人爲于大君。九四。履虎尾。愬愬。終吉。また象傳に、履。柔履剛也。說而應乎乾。是以履虎尾。不咥人。亨。また書經の君牙に、心之憂危。若蹈虎尾涉于春冰。また潘安仁の西征賦に、履虎尾不噬。寔要伯於子房。(新撰朗詠集の將軍)

○狐火や鬪纏に雨のたまる夜に

杜甫の兵車行に、古來白骨無人收。新鬼煩冤舊鬼哭。天陰雨濕聲啾啾。(古文眞寶)

常建の塞下曲に、鬪纏盡是長城卒。日暮沙場飛作灰。(唐詩選)

○冬川や舟に菜を洗ふ女有

樓穎の西施石に、西施昔日浣紗石。石上青苔思殺人。一去姑蘇不復返。岸傍桃李爲誰春。(唐詩選)

○蕭條として石に日の入枯野かな

李白の經下邳圯橋懷張子房に、唯見碧流水。曾無黃石公。嘆息此人去。蕭條徐泗空。(唐詩選)

蒙求の子房取履に、前漢張良字子房。其先韓人。嘗遊下邳圯上。有一老父衣褐。至良所。直隨其履圯下。謂曰。孺子下取履。……孺子見我濟北穀城山下。黃石即我已。遂去不見。且日視其書。廼太公兵法。良異之。常習誦。後從高帝過濟北。果得黃石。取而寶祠之。

蕭條の語の出典は多く、陶淵明の擬挽歌に、馬爲仰天鳴。風爲自蕭條。また杜甫の望野に、跨馬出郊時極目。不堪人事日蕭條。(唐詩選) また賈島の暮過山村に、蕭條桑柘外。煙火漸相親。(三體詩) また白居易の、蕭條去國意。秋風生故關。(新撰朗詠集の行旅) など。

○瘦脛や病より起つ鶴寒し

白居易の病中對病鶴に、同病病夫憐病鶴。精神不捐翅翎傷。未堪再舉摩霄漢。只今相隨覓稻梁。

墮葉を拾ひて紙に換たるもろこしの貧しき人も腹中の書には富るなるべしさればやまとうたのしげきことのはのうち散たるをかきあつめて捨ざるは我はいかしの道なるべし

○もしは草柿のもとなる落葉さへ

圓機活法の竹木門・木葉の題詩に、唐干柿晚步禁衢。於御溝得一紅葉云。殷勤謝紅葉。好去到人間。後得之。乃宮女韓氏所題。また同じく波間紅葉の唐顯況擅詩名に、嘗遊御溝上。得一大桐葉。上有詩云。一入深宮裏。年年不見春。波間寫紅葉。寄與有情人。また或は寒山子が竹木石壁に詩を題したことを云ふか。

蒙求の郝隆曬書に世説を引いて、郝隆。七月七日。出日中仰臥。人間其故。曰。我曬腹中書也。

○秋風の呉人はしらじふぐと汁

蒙求の張翰適意に晉書を引いて、張翰字季鷹。吳人。有清才。善屬文。……翰因見秋風起。乃思吳中菰菜蓴鱸魚鱠。曰。人生貴得適志。何能羈宦數千里。以要名爵乎。遂命駕而歸。(圓機活法の仕進門の致仕。及び退休にも)

○河豚の面世上の人を白眼ム哉

王維の與盧員外象過崔處士興宋林亭に、科頭箕踞長松下。白眼看他世上人。(唐詩選)

○驚うって鯨になき世の友とはむ

十八史略の春秋戰國の趙に、秦王約趙王會澠池。……相如復請秦王擊缶爲秦聲。……秦王爲一擊缶。

題七步詩

○雪折や雪を湯に焚釜の下

蒙求の陳思七歩に世説を引いて云ふ、魏文帝嘗令東阿王七歩作詩。不成當行法。卽應聲爲詩曰。煮豆持作羹。漉豉以爲汁。其在釜底然。豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急。帝深有慙色。また曹子建の七歩詩に、煮豆燃豆其。豆在釜中泣。本是同根生。相煎何太急。(古文眞寶・圓機活法の文學門・詩にも)

几董の浪華より歸さ

○霜百里舟中に我月を領す

干良史の春山夜舟に、掬水月在手。弄花香滿衣。(詩人玉屑)

無名氏の胡笳曲に、月明星稀霜滿野。氈車夜宿陰山下。(唐詩選)また白居易の琵琶行に、主人下馬客在船。…別時茫茫江浸月。忽聞水上琵琶聲。…東船西舫悄無言。唯見江心秋月白。…去來江口守空船。遶船明月江水寒。(古文眞寶)

故人曉臺余が寒妒を訪はずして歸郷す知是東山西野に吟行して荏苒として晦朔の代謝を知らず歸期のせまりたるをいかむともせざる成るべし

○牙寒き梁の月の鼠かな

李白の黃鶴樓送孟浩然之廣陵に、故人西辭黃鶴樓。烟花三月下揚州。(唐詩選)

王昌齡の出塞行に、秋天曠野行人絶。馬首東來知是誰。(同)

張華の勵志に、日歟月歟。荏苒代謝。(文選)

莊子の逍遙遊に、朝菌不知晦朔。

杜甫の夢李白に、落月滿屋梁。猶疑見顔色。(古文眞寶)

陶弘景贊

○山中の相雪の中のぼたん哉

王世貞の列仙全傳の卷五に、陶弘景字道明。…止句容之茅山。立館號曰華陽隱居。…梁武帝笑曰。此人欲數曳尾之龜。豈可復致。國家每有大事。無不咨之。時謂山中宰相。云云。

陳與義の題趙少隱青白堂に、雪裏芭蕉摩詰畫。炎天梅蕊簡齊詩。(聯珠詩格・禪林句集)

○易水にねぶか流るゝ寒さかな

十八史略の春秋戰國の燕に、荆軻行至易水。歌曰。風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。また駱賓王の易水送別に、此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已没。今日水猶寒。(唐詩選)

○鶴の美を盡してや冬木立

論語の八佾に、子謂韶。盡美矣。又盡善矣。謂武。盡美矣。未盡善也。

貧居八詠

○愚に耐よと窓を暗す雪の竹

蒙求の孫康映雪に孫氏世録を引いて、康家貧無油。常映雪讀書。(圓機活法の文學門・勤學にも)

○一瓢のいんで寝よやれ鉢たゞき

○わが捨しふくべが啼かかんこ鳥

蒙求の顔回簞瓢に、論語曰。一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。また同じく許由一瓢に逸士傳を引いて、許由隱箕山。無盃器。以手捧水飲之。人遺一瓢。得以操飲。飲訖掛於水上。風吹漑漑有聲。由以爲煩。遂去之。(圓機活法の人品門・高傑にも)

○齒豁に筆の氷を嚙む夜哉

韓退之の進學解に、頭童齒豁。竟死何裨。(古文眞寶)

倣素堂

○乾鮓や琴に斧うつひゞきあり

蒙求の戴逵破琴に、戴逵字安道。譙國人。少博學。善屬文。能鼓琴。工書畫。其餘巧藝。靡不畢綜。武陵王晞。聞其善鼓琴。使人召之。逵對使者破琴曰。戴安道不爲王門伶人。(圓機活法の音樂門・琴にも)

○訖禪師乾鮓に白頭の吟を彫

杜甫の奉贈王中允維に、窮愁應有作。試誦白頭吟。(杜律集解)また同じく杜甫の寄楊五桂州譚に、江邊送孫楚。遠附白頭吟。(同)諸本に注に、前漢の司馬相如の妻卓文君の作「白頭吟」の、願得一心人。白頭不相離。を引くとあり、また唐詩選に劉廷芝に「代悲白頭翁」があるが、直接には前の杜甫の作であらう。

○寒聲や古うた諷ふ誰が子ぞ

杜甫の白帝城最高樓に、杖藜嘆世者誰子。泣血迸空回白頭。(杜律集解)

○玉鬻漂母が鍋をみだれうつ

蒙求の漂母進食に、前漢韓信。家貧。…至城下釣。有一漂母。哀之飯信數十日。曰。吾必重報母。母曰。大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食。豈望報乎。(圓機活法の人品門・貧士にも)

鐵骨といふは梅の枝を寫する画法也

○寒梅や火の迸る鐵より

白居易の琵琶行に、銀瓶乍破水漿迸。鐵騎突出刀鎗鳴。(古文眞寶)

禪林句集の五言對句に、桃李火中開。黃昏後日出。

春泥舎に遊びて

○靈運もこよひはゆるせとし忘

蒙求の靈運曲筥に世説新語を引いて、謝靈運好戴曲柄

笠。孔隱士謂曰。卿欲希心高遠。何不能遺曲蓋之貌。謝答曰。將不畏影者。未能忘懷。南史……世稱謝康樂。爲永嘉太守。郡有名山水。素所愛好。肆意遊遨。

題 杏

○石公へ五百目もどすとしのくれ

○杏おとす音のみ雨の椿かな

蒙求の子房取履に、前漢張良字子房。其先韓人。嘗遊下邳圯上。有一老父衣褐。至良所。直墮其履圯下。謂曰。孺子下取履。良愕然欲歐之。爲其老。廼彊忍。取履因跪進。父以足受之。笑去。……出一編書曰。讀是則爲王者師。後十年興。十三年孺子見我濟北穀城山下黃石。卽我已。遂去不見。且日視其書。廼太公兵法。良異之。常習誦。後從高帝過濟北。果得黃石。取而寶祠之。また李白の經下邳圯上懷張子房に、我來圯橋上。懷古欽英風。唯見碧水流。曾無黃石公。嘆息此人去。肅條徐泗空。(唐詩選)

○餅舊苔の礪を削れば風新柳のけづりかけ

都良香の春暖に、氣霽風梳新柳髮。水消浪洗舊苔鬚。(和漢朗詠集の早春)

○蛤にたゝれぬ鳴や春の暮

戰國策の燕策に、趙且伐燕。蘇代爲燕謂惠王曰。今日臣來過易水。蚌方出暴。而鸕啄其肉。蚌合而箝其喙。鸕曰。今日不雨。明日不雨。卽有死蚌。蚌亦謂鸕曰。今日不出。明日不出。卽有死鸕。兩者不肯捨。云々。

○ゆく春やおもたき琵琶の抱ごゝろ

杜甫の暮寒に、沈沈春色靜。慘慘暮寒多。……忽思高宴會。朱袖拂雲和。(杜律集解)また王昌齡の西宮春怨に、西宮夜靜百花香。欲捲朱簾春恨長。斜抱雲和深見月。隴隴樹色隱昭陽。(唐詩選)

○行春の尻べた拂ふ落花哉

李白の春夜宴桃李園序に、開瓊筵以坐花。飛羽觴而醉月。(古文眞寶)

○手燭して庭踏人や春おしむ

同じく李白の同序に、古人秉燭夜遊。良有以也。況陽春召我以煙景。大塊假我以文章。會桃李芳園。云々。(古文眞寶)また白居易の春夜與盧四周諒華陽墅同居に、背燭共憐深夜月。踏花同惜少年春。(和漢朗詠集の春夜)また同じく白居易の遊雲居寺贈穆三十六地主に、亂峯深處雲居路。共踏花行獨惜春。

春夜小集探題得峩眉山月歌

○うすぎぬに君が朧や峩眉の月

李白の峩眉山月歌に、夜發清溪向三峽。思君不見下渝

州。(古文眞寶・唐詩選)

○手枕に身を愛すもおぼる月

論語の述而に、子曰。飯疏食。飲水。曲肱而枕之。樂亦在其中矣。

壬生山科屋がもとにて俳諧興行有ける時

○壬生寺の猿うらみ啼けおぼる月

謝觀の清賦に、巴峽秋深。五夜之哀猿叫月。(和漢朗詠集の猿)

○更衣塵うち拂ふ朱の杏

蒙求の屈原澤畔に漁父辭を引いて、屈原曰。吾聞之。新沐者必彈冠。新浴者必振衣。誰能以身之察察。受物之汶汶者乎。(古文眞寶に漁父辭を収録す)また王維の酌酒與裴迪に、白首相知猶按劍。朱門先達笑彈冠。(唐詩選)

○枕する春の流れやみだれ髪

蒙求の孫楚漱石に晉書を引いて、孫楚字子荆。……初楚少時欲隱居。謂王濟曰。當欲枕石漱流。誤云漱石枕流。濟曰。流非可枕。石非漱。楚曰。所以枕流。欲洗其耳。所以漱石。欲厲其齒。

○春雨や同車の君のさゝめごと

詩經の鄭風の有女同車に、有女同車。顔如舜花。また孔子家語に、靈公與夫人同車。

○大人なる男の子起けり時鳥

無名氏の伊州歌に、打起黃鶯兒。莫教枝上啼。啼時驚妾夢。不得到遼西。(唐詩選)

○背のひくき馬に乗る日の霞哉

陸放翁の冬初出遊に、蹇驢渺渺涉煙津。十里山村發興新。青旆酒家黃葉村。相逢俱是畫中人。

○野邊の梅白くも赤くもあらぬ哉

唐子西の二月見梅に、桃李能紅李能白。春深何處無顔色。不應尙有一枝梅。可是東君苦留客。向來開處當嚴冬。白者未白紅未紅。(古文眞寶・終り二句は禪林句集にも見ゆ)また杜甫の西郊に、市橋官柳細。江路野梅香。(杜律集解)

○梅が香に夕暮早き麓哉

林和靖の山園小梅に、疎影橫斜水清淺。暗香浮動月黃昏。(禪林句集・圓機活法の百花門・梅花)

○君のゆく柳みどりに道長し

王維の送元二使安西に、渭城朝雨浥輕塵。客舍青青柳色新。勸君更盡一杯酒。西出陽關無故人。(三體詩)

○雨の日や都に遠き桃のやど

杜牧の清明に、清明時節雨紛紛。路上行人欲斷腸。借問酒家何處有。牧童遙指杏花村。(同)

○畑うつや道問人の見えずなりぬ

論語の微子に、長沮・桀溺耦而耕。孔子過之。使子路問津焉。長沮曰。夫執輿者爲誰。子路曰。爲孔丘。是魯孔丘與。曰。是也。曰。是知津矣。問於桀溺。桀溺曰。子爲誰。爲仲由。曰。是魯孔丘之徒與。對曰。然。滔滔者天下皆是也。而誰以易之。且而與其徒辟人之士也。豈若從辟世之士哉。耒而不輟。云々。

○舟よせて鹽魚買ふや梅の岸

常建の三日尋李九莊に雨歇楊林東渡頭。永和三日盪輕舟。故人家在桃花岸。直到門前溪水流。(唐詩選)

花影上欄干山影入門などすべてもろこし人の奇作也
されど只一物をうつしうごかすのみ。我日のものとの
俳諧の自在は渡月橋にて

○月光西にわたれば花影東に歩むかな

王安石の春夜に、春色惱人眠不得。月移花影上欄干。
(聯珠詩格・錦繡段)

百練抄解に、山影入門推不出。

大井川の上流に遊びて陶弘景が詩を感ず

○ゆく水にちればぞ贈る花の雲

○冬川や佛の花の流れ來る

陶弘景の詔問山中何所有賦詩以答に、山中何所有。嶺上多白雲。只可自怡怡。不堪持贈君。(古今詩刪)

李白の山中答俗人に、桃花流水杳然去。別有天地非人間。(古文眞寶)

加茂の堤はむかし文祿のころ防河使に命ぜられてあらたにきづかれたりさてこそ桃花水の愁もなくて庶民安堵のおもひをなせり

○加茂堤太閤様のすみれかな

王維の桃源行に、春來遍是桃花水。不辨仙源何處尋。
(和漢朗詠集の三月三日) 漢書の溝洫志に、來春桃花水盛。必羨溢。有填游反壤之害。

諸子とわたのみさきの隣松院に會す。題を探つて偶春草を得たり余不堪感慨しきりにおもふ王孫萬里なほいつちにあるや故郷の春色誰が爲にか來去す王孫王孫君が遠遊に倣ふべからず君が無情學ぶべからず

○我歸る路いく筋ぞ春の草

楚辭の招隱に、王孫遊兮不歸。春草生兮萋萋。また圓機活法の百草門・芳草の王孫歸不歸に、王維の詩を擧げて、春草年年綠。王孫歸不歸。また劉安の招隱士に、王孫遊兮不歸。春草生兮萋萋。(文選) また温庭筠の楊柳枝に、繫得王孫歸意切。不關春艸綠萋萋。(唐詩選)

樓穎の西施石に、一去姑蘇不復返。岸傍桃李爲誰春(同)

また無名氏の絶句に、春光冉冉歸何處。更向樽前把一盃。盡日問花花不語。爲誰零落爲誰開。(聯珠詩格)

見世のはし居もおのづから蘭臺萬里の涼を得べし

○襟にふく風あたらしきここちかな

宋玉の風賦に、楚襄王遊于蘭臺之宮。宋玉・景差侍。有風颯然而至。楚王披襟而當之曰。快哉此風。寡人所與庶人共者邪。(文選)

○小舟にて僧都を送る春の水

儲光羲の寄孫山人に、新林二月孤舟還。水滿清口花滿山。借問故園隱君子。時時來往住人間。(唐詩選)

○みじか夜や淺瀬にのこる月一片

李白の子夜吳歌に、長安一片月。萬戶擣衣聲。(同)

○目に嬉し戀君の扇眞白なる

班婕妤の怨歌行に、新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團團似明月。(古文眞寶)

○さみだれに見えずなりぬる徑哉

柳宗元の江雪に、千山鳥飛絶。萬徑人蹤滅。(詩人玉屑)

○鮎の石に五更の鐘のひゞきかな

杜甫の閨夜に、五更鼓角聲悲壯。三峽星河影動搖。(杜律集解) また良春道の山寺立春に、夜向殘更寒燄盡。春生香火曉爐燃。(和漢朗詠集の立春)

○涼舟軸にたち盡す列子哉

莊子の逍遙遊に、列子御風。冷然善也。

○曠野ゆく身に近づくや雲の峯

○立枯の木に蟬なくて雲のみね

陶淵明の四時に、春水滿四澤。夏雲多奇峯。(古文眞寶)

○いざさらば蚊遣のがれん虎溪まで

圓機活法の人品門・高傑の三笑圖に、惠遠法師。送陶元亮・陸脩靜。不覺過虎溪。因相與大笑。今世傳三笑圖是也。

霍英文臺開

○雲を開く山ほととぎす第一義

許渾の題發幽居將尋同志に、一聲山鳥曙雲外。萬點水螢秋草中。(和漢朗詠集の郭公)

○大門のおもき扉や春の暮

齊巴の、春深遊寺客。花落閉門僧。(詩人玉屑)

○時鳥琥珀の玉をならし行

儲光羲の洛陽道獻呂四郎中に、大道直如髮。春日佳氣多。五陵貴公子。雙雙鳴玉珂。(唐詩選) また杜甫の鄭附馬潛曜宴洞中に、春酒杯濃琥珀薄。冰漿盃碧瑪瑙寒。……時間雜佩聲珊珊。(杜律集解)

○なかなか雨の日は啼閑古鳥

直幹の葢聲入微館に、山館雨時鳴自暗。野亭風處織猶寒。(和漢朗詠集の蟲)

○月の句を吐てへらさん蟾の腹

淮南子の精神訓に、日中有踰鳥。月中有蟾蜍。また圓機活法の天文・月の蟾兔に五經通義を引いて、月中有兔與蟾蜍何也。月陰也。蟾陽也。而與蟾並明。陰係陽也。また同じく金蝦蟆に西陽雜俎を引いて、長慶中。中秋夜有人玩月。見林中光屬天如疋布。尋視之。見一金背蝦蟆。

○うたゝ寝の貌に離騷や蠅まれ也

蒙求の王思怒蠅に魏志を引いて、王思濟陰人。領豫刺史。……嘗執筆作書。蠅集筆端。驅去復來。如是再三。思恚怒。自起逐蠅。不能得。還取筆擲地。蹋壞之。また歐陽修に憎蒼蠅賦あり。(古文眞寶)

○ぼうふりの水や長沙の裏借家

張均の岳陽晚景に、長沙卑湿地。九月末成衣。(唐詩選) また賈至の岳陽樓重宴別王八員外貶長沙に、莫道巴陵湖水闊。長沙南畔更蕭條。(同)

○若竹や十日の雨の夜明がた

圓機活法の天文門・雨の時雨に論衡を引いて、太平之世。五日一風。十日一雨。風不鳴枝。雨不破塊。再必至夜。また同じく久雨の十日夜に說苑を引いて、楚莊王伐陳。吳救之。雨十日十夜晴。

○やゝ廿日月も更行ばたむかな

白居易の牡丹芳に、花開花落二十日。一城之人皆若狂。

○詠物の詩を口ずさむ牡丹哉

漢詩において、草木・禽獸・蟲魚・花月などの物名を題目として作詩することを詠物と云ひ、三體詩には七言律詩に詠物の格を設けてゐる。また詩人玉屑にも詠物の句法がある。唐の李嶠、元の謝宗可に詠物詩選があり、康熙御定の佩文齋詠物詩選などもある。勿論牡丹の詩もある。

○山蟻の覆道造る牡丹かな

杜牧の阿房宮賦に、複道行空。不霽何虹。(古文眞寶) また洛賓王の帝王篇に複道斜通鳩鵲觀。交衢直指鳳凰臺。(唐詩選) また盧照鄰の長安古意に、複道交窗作合歡。雙闕連臺重鳳翼。(同)

○方百里雨雲よせぬばたん哉

孟子の公孫丑上に、以德行仁者王。王不待大。湯以七十里。文王以百里。李白の清平調に、一枝濃艷露凝香。雲雨巫山枉斷腸。(唐詩選)

○柚の花や能酒藏す罍の内

蘇東坡の後赤壁賦に、婦曰。我有斗酒。藏之久矣。以待子之不時需。(古文眞寶)

○夕がほや行燈提し君は誰そ

李白の春夜宴桃李園序に、古人秉燭夜遊。良有以也。(同)

○ゆふがほや竹焼く寺のうすけぶり

杜牧の酔後題僧院に、今日鬢絲禪榻畔。茶烟輕颺落花風。(三體詩)

○藻の花や小舟よせたる門の前

常建の三日尋李九莊に、雨歇楊林東渡頭。永和三日盪輕舟。故人家在桃花岸。直到門前溪水流。(唐詩選)

○藻の花を分て許由が手水哉

蒙求の許由一瓢に逸士傳を引いて、許由隱箕山。無盃器。以手捧水飲之。云々。

○ぬなはとる小舟に歌はなかり覺

陸放翁の采蓮曲に、采蓮吳妹巧笑倩。小舟點破煙波面。雙頭折得欲有贈。重重葉蓋羞人見。また李白の採蓮曲に、若耶溪傍採蓮女。笑隔荷花共人語。(古文眞寶・圓機活法の百花門・採蓮)

魚赤たのふだる人の七回忌追福のためにしれるどちの發句を乞て手向ぐさとなすも則ち讚佛場の因なるべし

○梢より放つ後光やしゆるの花

白居易の香山寺白氏洛中集記に、願以今生世俗文字之業。狂言綺語之誤。翻爲當來世世讚佛乘之因。轉法輪之緣。(和漢朗詠集の佛事)

○蟻王宮朱門を開く牡丹哉

駱賓王の帝京篇に、朱門無復張公子。灞亭誰畏李將軍。(唐詩選) また王維の酌酒與裴迪に、白首相知猶按劍。朱門先達笑彈冠。(同) 圓機活法の樹木・槐に異聞集を引いて、淳于棼家廣陵。宅南有古槐。棼醉臥其下。夢二使者。曰。槐安國王奉邀。棼隨二使入穴中。曰大槐安國。王曰。吾南柯郡政事不理。屈卿爲守。至郡累日乃寤。尋古槐下。穴洞然明朗。可容一榻。有二大蟻。乃槐安國王。又尋一穴。直上南枝。即南柯郡。(同書の時令門、晝寢の南柯蟻にも)

○蟬なくや行人絶るはし柱

王昌齡の出塞行に、秋天曠野行人絶。馬首東來知是誰。(唐詩選)

○天にあらば比翼の籠や竹婦人

白居易の長恨歌に、在天願作比翼鳥。在地願作連理枝。

（古文眞寶）

○谷路行人は少き若葉かな

同じく長恨歌に、峨眉山下少人行。……蜀江水綠蜀山青。（同）

○魂祭王孫いまだ歸り來ず

楚辭の招隱に、王孫遊兮不歸。春草生兮萋萋。その他前出。

○月見ぶねきせるを落す淺瀬哉

呂氏春秋の察今に、楚人有涉江者。其劍自舟中墜於水。遂契其舟曰。是吾劍之所從墜。舟止。從其所契者。入水求之。舟已行矣。而劍不行。求劍若此。不亦惑乎。

○根に歸る花や吉野の蕎麥畑

清原滋藤の詩句に、花悔歸根無益悔。鳥期入谷定延期。（和漢朗詠集の間三月）

○鯛煮る宿にとまりつ後の月

白居易の縛戎人に、朝飡飢渴費杯盤。夜臥腥臊汚牀席。

○盗人の首領哥よむけふの月

魏の曹操の短歌行に、月明星希。烏鵲南飛。繞樹三匝。無枝可依。云々。（文選）（曹操は漢の天下を篡奪せんとしたれば「盗人の首領」と云へるか）

○後の月賢き人とふ夜哉

蘇東坡の後赤壁賦に、是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨臯。……已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良夜何。（古文眞寶）また蒙求の子猷尋戴に、晉王徽之。嘗居山陰。夜雪初霽。月色清朗。四望皎然。獨酌酒。詠左思招隱詩。忽憶戴逵。時逵在剡。便夜乘小船詣之。（圓機活法の天文門・雪にも）

探題水音

○風呂捨る温公の宿や秋の聲

冷齋夜話に、司馬温公。童時與群兒戲。一兒墜大甕水中。群兒驚走。公以石擊甕。水迸出。兒得不死。

○唐黍のおどろきやすし秋の風

耿湋の秋日に、古道少人行。秋風動禾黍。（唐詩選）

○山くれて紅葉の朱をうばひけり

論語の陽貨に、子曰。惡紫之奪朱也。惡鄭聲之亂雅樂也。惡利口之覆邦家者。

○岡の家の海より明て野分哉

張祜の題松汀驛に、海明先見日。江白迴聞風。（唐詩選）

○後の月鳴たつあとの水の中

菜根譚に、古徳曰。竹影掃階塵不動。月輪穿沼水無痕。

○さればこそ賢者は富まず敗荷

圓機活法の百花門に「敗荷」の項あり。周茂叔の愛蓮説

に、予謂。菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。（古文眞寶・圓機活法の百花門・蓮花）また書言故事に、蓮花曰花中君子。蒙求の原憲桑樞に莊子を引いて、原憲居魯。環堵之室。茨以生草。蓬戸不完。桑以爲樞。而甕牖二室。褐以爲塞。上漏下濕。匡坐而絃。また同じく顔回簞瓢に論語を引いて、一簞食。一瓢飲。在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。

○帛を裂琵琶の流や秋の聲

白居易の琵琶行に、潯陽江頭夜送客。楓葉荻花秋瑟瑟。……曲終抽撥當心畫。四絃一聲如裂帛。（古文眞寶）

○熊野路や三日の糧のことし米

莊子の逍遙遊に、適莽蒼者。三澹而反。腹猶果然。適百里者。宿舂糧。適千里者。三月聚糧。

○新そばや根來の椀に盛來ル

李白の客中行に、蘭陵美酒鬱金香。玉碗盛來琥珀光。（唐詩選）

○狩衣の袖より捨る扇かな

班婕妤の怨歌行に、新裂齊紈素。皎潔如霜雪。裁爲合歡扇。團團似明月。出入君懷袖。動搖微風發。常恐秋節至。涼飈奪炎熱。棄捐篋笥中。恩情中道絕。（古文眞寶）

官 女

○日を帶て芙蓉かたぶく恨哉

司馬温公の初夏に、四月清和雨乍晴。南山當戶轉分明。更無柳絮因風起。惟有葵花向日傾。（聯珠詩格・詩人玉屑）王昌齡の長信秋詞に、玉顏不及寒鴉色。猶帶昭陽日影來。（三體詩）

○芦の花漁翁が宿のけぶり飛ぶ

柳宗元の漁翁に、漁翁夜傍西岸宿。曉汲清湘燃楚竹。煙消日出不見人。欸乃一聲山水綠。（古文眞寶）

○盗人の屋根に消行夜寒かな

蒙求の陳寔遺盜に後漢書を引いて、陳寔字仲弓。潁川許人。少作縣吏。爲都亭刺佐。……時歲荒。有盜夜入其室。止於梁上。寔陰見之。呼子孫正色訓之曰。夫人不可不自勉。不善之人。未必本惡。習以性成。遂至於此。梁上君子是矣。

○門を出て故人にあひぬ秋のくれ

古辭に、步出城東門。遙望江南路。前日風雪中。故人從此去。（古今詩刪）

○釣人の情のこはさよ夕時雨

○水鳥も見へぬ江わたるさむさ哉

柳宗元の江雪に、千山鳥飛絕。萬徑人蹤滅。孤舟蓑笠翁。獨釣寒江雪。（詩人玉屑）

○半江の斜日片雲の時雨かな

杜甫の戯題王宰畫山水歌に、焉得并州快剪刀。剪取吳松半江水。(古文眞實)

杜甫の題張氏隱居に、澗道餘寒歷冰雪。石門斜日到林丘。(唐詩選)

杜甫の野老に、長路關心悲劍關。片雲何意傍琴臺。(杜律集解) また杜律集解に、片雲天共遠。片雲頭上黑。青天卷片雲。など見ゆ。

○鐘老聲饑て鼠糞を食こぼす

詩經の周南・行露に、誰謂鼠無牙。何以穿我墻。また野相公の秋夜に、床嫌短脚蜚聲鬧。壁厭空心鼠孔穿。(和漢朗詠集の蟲)

○麥蒔の魍魎長き夕日哉

莊子の齊物論に、罔兩問景曰。曩子行。今子止。曩子坐。今子起。何其無特操與。注に、罔兩景之景也。

○夕ざれて韭の羹喰ひけり

○腐儒者韭の羹喰ひけり

圓機活法の蔬菜門・韭の夜雨剪に、郭林宗。見友人冒雨剪韭。作炊餅。今洛人倣之。また同じく人品門・貧士の毎食三韭に、齊庾杲之清貧、食唯有韭俎。任昉戲之曰。誰謂即貧。食常二十七種。蓋言三韭也。また杜甫の贈衛八處士に、夜雨剪春韭。新炊聞黃梁。(古文眞實) 荀子の非相に、易曰。括囊。無譽。無咎。腐儒之謂也。また杜甫の賓至に、竟日淹留佳客坐。百年粗糲腐儒餐。(杜律集解)

○わらび野やいざ物焚ん枯つゝじ

○石に詩を題して過る枯野哉

○鮓をおす石上に詩を題すべく

○寒山に木を伐て乾鮓を煮る

○鮓と汁鼎に伽羅を焚夜哉

白居易の送王十八歸山寄題仙遊寺に、林間煖酒燒紅葉。石上題詩拂綠苔。(和漢朗詠集の秋興)

○宿老の紙衣の肩や朱陳村

白居易の朱陳村に、徐州古澧縣。有村曰朱陳。去縣百餘里。桑麻青氛氳。機梭聲札札。牛驢走紆紆。女汲澗中水。男採山上薪。縣遠官事少。山深人俗淳。云々。

○墨染の夜の錦やはちたゝき

十八史略の西漢太祖高皇帝に、項羽見秦殘破。且思東歸。曰。富貴不歸故鄉。如衣繡夜行耳。云々。

○木がらしや廣野にどうと吹起る

張子容の涼州歌第二疊に、朔風吹葉雁門秋。萬里烟塵昏戍樓。(唐詩選) また常建の塞下曲に、北海陰風動地來。

明君祠上望龍堆。(同)

○大雪となりけり關の戸ざし時

韓退之の左遷至藍關示姪孫湘に、雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。(同)

○雪折も遠く聞えて夜ぞふけぬ

元唐卿の雪夜訪僧に、一天明月曝銀河。童子敲冰夜煮茶。坐久忽聞庭竹折。老僧持呪保梅花。(錦繡段)

○鴛や花の君子はかれてのち

周茂叔の愛蓮説に、蓮花之君子者也。(古文眞實・前出)

元微之の十日菊花に、不是花中偏愛菊。此花開後更無花。(和漢朗詠集の菊)

○水鳥も見えぬ江わたる寒さ哉

○里ふりて江の鳥白し冬木立

杜甫の絶句に、江碧鳥逾白。山青花欲然。(唐詩選)

○鮓汁の君よ我等よ子期伯牙

蒙求の伯牙絶絃に列子を引いて、伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。伯牙鼓琴。志在高山。子期曰。善哉峩峩乎若泰山。志在流水。子期曰。善哉洋洋乎若江河。伯牙所念。子期必得之。(圓機活法の志氣門・知音にも)

○寒月や松の落葉の石を射る

蒙求の李廣成蹊に、前漢李廣。隴西成紀人。世世受射法。……廣出獵。見草中石。以爲虎射之。中石没矢。視之石也。他日射終不能入。

○河豚汁や五侯の家の辰足

韓翃の寒食に、日暮漢宮傳蠟燭。青烟散入五侯家。(唐詩選・三體詩)

○突とめた鯨や眠る峯の月

梅聖俞の採石月贈郭功甫に、採石山下訪謫仙。夜披錦袍坐釣船。醉中愛月江底懸。……便當騎鯨上青天。(古文眞實) また馬子才の燕思亭に、李白騎鯨飛上天。江南風月閑多年。(同)

王 羲 之

○物書て鴨に換けり夜の雪

李白の王右軍に、右軍本清真。瀟灑在風塵。山陰遇羽客。要此好鵝賓。掃素寫道經。筆精妙入神。書罷籠鵝去。注に晉書を引いて、山陰有道士。好養鵝。羲之往觀。求而市之。道士云。爲我寫道德經。舉群相贈。羲之寫畢。籠鵝而歸。(古文眞實)

○かぜ一陣水鳥白く見ゆるかな

日野資朝の辭世に、將首當白刃。截斷一陣風。(太平記) 杜甫の絶句に、江碧鳥逾白。山青花欲然。(唐詩選・前出)

○寒月や門を叩けば杵の音

賈島の題李疑幽居に、鳥宿池中樹。僧敲月下門。（三體詩・詩人玉屑）

○炭賣に日のくれかゝる師走哉

○木がらしや炭賣ひとりわかし舟

白居易の賣炭翁に、賣炭翁。……可憐身上衣正單。心憂炭賤願天塞。夜來城外一尺雪。曉駕炭車輾氷轍。云々。

除 夜

○いざや寝ん元日は又あすのこと

高適の除夜作に、旅館寒燈獨不眠。客心何事轉凄然。故鄉今夜思千里。霜髮明朝又一年。（唐詩選）また戴叔倫の除夜宿石頭驛に、愁顔與衰賓。明日又逢春。（三體詩）

○冬ごもり燈光虱の眼を射る

杜甫の十七夜對月に、光射潛虬動。明翻宿鳥頻。（杜律集解）

○鍋敷に山家集あり冬籠

白居易の祕省後廳に、盡日後廳無一事。白頭老監枕書眠。また石林詩話に、青山捫虱坐。黃鳥挾書眠。（圓機活法の人事門・間適）

芭蕉忌

○時雨おとなくて苔にむかしをしのぶ哉

杜甫の春夜喜雨に、隨風潛入夜。潤物細無聲。（杜集律解・圓機活法の天文門・雨にも）

傳温の春日山居に、春風暗剪庭前樹。夜雨偷穿石上苔。（和漢朗詠集の風）

○雨の時貧しき蓑の雪に富り

王荊公の勸學文に、貧者因書富。富者因書貴。（古文眞寶）また劉長卿の酬李穆見寄に、欲掃柴門迎遠客。青苔黃葉滿貧家。（三體詩）

○玉あられこけるや富士の天邊より

王昌齡の送薛大赴安陸に、遙送扁舟安陸郡。天邊何處穆陵關。（唐詩選）

○初霜やわづらふ鶴を遠く見る

杜牧の鶴に、終日無群伴。溪邊弔影孤。同じく杜牧の早鷹に、金河秋半虜弦開。雲外驚飛四散哀。仙掌月明孤影過。長門燈暗數聲來。（詩人玉屑）

○相火桶無絃の琴の撫ごころ

蒙求の陶潛歸去に、晉陶潛字元亮。潯陽人。……性不解音。畜素琴一張。絃徽不具。每朋酒之會。則撫而和之曰。但識琴中趣。何勞絃上聲。

○寒菊や愛すともなき垣根哉

陶淵明の雜詩に、採菊東籬下。悠然見南山（古文眞寶）

以上蕪村の句と、その背景となり、或は直接影響を及ぼしたと思はれる漢詩文を掲げたのであるが、一般に理解せられてゐる程度を遙かに越えて、蕪村の句が漢詩文の影響の下になったことが知られて、全く驚かされるのである。しかもその攝取の方法も多岐に涉つてゐて、中國文學が日本の古典と同様の取扱ひを受けてゐる點に興味深いものがある。更に背景となった漢籍を考察してみると、主たる引用文献として次の如きものが認められるのである。

古文眞寶（前後集共）

三體詩

唐詩選

聯珠詩格

禪林句集

古今詩刪

錦繡段

和漢朗詠集

圓機活法

詩人玉屑

白氏文集

陶淵明集

杜律集解

莊子

蒙求

十八史略

詩經

などの書を擧げることが出来ると思ふ。私の管見では蕪村の句についてみる時、大體これらの書でその引用は解決出来るのではないかと考へてゐる。更に彼の散文を分析してみないと明確には言い難いが、右が彼の愛読書であつたことは否定し得ないであらう。これを芭蕉と比較してみると、大率一致するのであつて、何れも江戸時代に流布し、和刻本も多く出ている書物と云ふことが出来るのである。次に右の書物について、漢籍の解題を読む勞に替へて、簡単に解説しておかうと思ふ。

古文眞寶。前後集各十卷、計二十卷。編者は宋の永陽の黃堅と云ふ。前集は漢より唐に至る有名な五言古風・七言古風・長短句・歌・行・吟・曲の古詩に勸學文を付して収めてゐる。後集は楚の屈原から宋に至るまでの古文を辭・賦・説・序・記などの十六類に分類収録してゐる。編纂が簡にして要を得、漢文學を愛讀する者の必讀の詩文を収め、江戸時代を通じて廣く行なはれた書である。特に後集は韓・柳の古文の流行の影響もあつて盛行を見た。刊本も多く、注釋書も林羅

山の諺解の他、邦人の著作も多い。

三體詩。正しくは三體唐詩または唐賢三體詩家法と云ふ。三卷。宋の淳祐の人で汝陽の周弼の撰である。彼はこの書を以て詩法を子弟に教へ、當時の詩弊を矯正せんとしたものである。唐の詩人一百六十七人の詩を、三體即ち七言絶句・七言律詩・五言律詩に分類し、更に七絶では實接・虚接・用字・前對・後對・拗体の七格、七律では四實・四虚・前虚後實・前實後虚・結句・詠物の六格、五律では七律の格に意を加へ、結句・詠物が起句・結句になってゐる。わが國では先ず五山の詩僧に尊重せられ、江戸に入っても多くの刊本がある。詩は大率矩則格調が正しく、調子は流暢、措辭は幽麗で、初學者にも便利であるために大に行なはれた。一般に釋圓至注・斐庚増注が行なはれたが、熊谷立閑・素隱・森川許六に注釋書が出てゐる。

唐詩選。七卷。明の李于鱗に仮託した偽書である。狡猾なる書肆が李于鱗の盛名を奇貨とし、彼が撰著を志して果さなかつた唐詩選の序を付して刊行したものである。江戸初期に傳來し、先ず那波活所が推稱し、特に荻生徂徠・服部南郭の激稱を得たため、元祿以後に最も流行した書物である。白居易の作の収められてをらない恨などはあるが、大体唐詩の秀作を収録せられてゐるために、苟も學問に志す者は悉く目を通した書であつて、刊本も頗る多い。一百二十七人の詩四百六十五首を、五古・七古・五律・五排・七律・五絶・七絶の順に分類してゐる。

聯珠詩格。二十卷。元の于濟撰・蔡正孫補。正しくは精選唐宋千家聯珠詩格である。唐宋の詩人の七言絶句を、四句全對・起聯平側對・起聯協韻對などの詩格から、用前身字・用後身字の用字格に至るまで凡そ三百二十格に分類して収録してゐる。この書は中國に早く散佚した。我が國では古文眞寶・三體詩と共に五山の僧徒の間に尊重せられ、五山版で開版せられた。徳川時代も流行し、特に中期以後は盛行を見、刊本も多い。元來詩學の書であるが、作者のみならず一般の漢詩愛好家に讀まれた書である。

禪林句集。二卷。臨濟宗の僧英朝の撰である。英朝は東陽と號し、京都の妙心寺及び大徳寺に住し、雪江宗探の開示を受けて心印を傳持した。永正元年示寂、年七十七。著書は禪林句集の外に正燈録がある。また無孔笛十卷は、門人がその法語を集めて編纂したものである。禪林句集は涅槃經・楞伽經・金剛經・維摩經などの經典、碧巖集・虚堂録・無門關・臨濟集などの祖録、更に儒教の四書五經・老子・莊子など諸子の書、史記・漢書・晉書などの史書、淵明集・李太白集・東坡集・山谷集などの詩文集に至るまで、禪林初學者の入門

に當つて、取つて資とすべき詩句文章を、一字關・二字關・三字關・四言・五言・五言對句・六言・六言對句・七言・七言對句・八言・八言對句の十二の形に分類してゐる。この書は單に禪林においてのみならず、一般にも廣く讀まれた。流布本としては貞享の刊本がある。

古今詩刪。三十四卷。明の李于鱗の撰。書名は古今の詩の不正なるものを刪つて正しきものを存する意である。漢より陳に至る樂府より詩に及び、唐の五古・七古・五律・五排・五絶・七絶を取り、宋・元を除いて明人の古詩・絶句を収めてゐる。先に述べた唐詩選はこの唐代のものを取り、これを増減したものであると云ふ。従つて唐詩選と重複してゐるのは、唐詩選を出典として記した。我が國では寛保三年刊の良本がある。

錦繡段。一卷。五山の詩僧天隱龍澤の撰である。唐・宋・元・明の詩人二百二十二家の七言絶句三百二十八首（流布本三百三十一首）を、天文・地理・節序・人品などの十八部門に分つてゐる。詩は大率平明清淡で、禪的風韻に富んだものが多い。先ず慶長勅版本として刊行せられ、次いで元和二年の整版が出で、寛永・寛文・貞享・元祿年間に刊行せられた。江戸初期、特に元祿の頃までは盛行した書であつたが、唐詩選の流行と共に衰へた。しかし多くの刊本が存して一般に讀まれた書物であつた。

和漢朗詠集。藤原公任の撰で、漢詩文・和歌の麗章佳句の、興に乗じて朗誦高吟に適するものを選んだもので、漢詩文では五百八十四句が採られてをり、これを四季と雜の五部に分類してゐる。作家は本邦人五十二人、中國人二十八人で、特に白樂天の作品が最も多く、百三十五句に達してゐる。この書は國文學に長く且大きく影響した書であつた。數種の寫本があるが、寛永・寛文・享保・元祿に注釋書が刊行せられてゐる。信教の私注、玄惠の鈔、季吟の集註、蘭山の國字抄、惟中の諺解などである。

圓機活法。二十四卷。正しくは圓機活法詩學全書と云ふ。楊淙著。李衡仲の萬曆年間の序文を付してゐる。楊淙の傳記は詳にしないが、王世貞校正とあるのは、當時盛名の學者であり詩人であつた王世貞の名を仮りた、書肆の射利的手段に出たものと考へられ、唐詩選同様に偽書といふことになるであらう。これは題名の示す如く、故事成語等を類聚して作者の便に供するのが目的である。作詩する時に詩語・故事・成語・熟語などを探り、先人の詩句を擧げて作例を示し、韻を求めるのに便利なやうに編纂せられてゐるために、初學者には特に好都合な詩學便覽である。内容は天文・時令・節序・地理・城市・などの四十四部門に類別し、各部門について

は更に細かく項目を分けてある。今最初の天文の部に例を取ってみると、天・日・日影・斜陽・春日などの項に分ち、それを更に細かく敘事・事實・品題・大意・起句・聯句・結句などの見出しを付し、敘事・事實・品題にはその下に故事・出典・熟字・成句などの詩語を提示し、割注を以て詳細に説明解説し、或は出典を明示してある。大意・起句・聯句・結句については、熟語や古人の句を示して作詩者の便に供してある。これは作詩上實用の書として重寶な書である。芭蕉もこの書を愛讀してゐたことは、舊著『芭蕉と中國文學』に引用を擧げて述べたところであるが、最近『錦繡段』などの書と共に注目せられてゐるやうである。しかし芭蕉においても蕪村においても同様のことが云へるのであるが、この書を以て作詩の爲に用ひたものではなく、教養の書として讀んだものであった。江戸時代の文化人の多くはさうであった。恰もわれわれが百科事典を利用するやうな調子であった。全く教養の各分野に涉って網羅した珍重すべきもので、任意にあちこちを開いて讀み、一般教養の資としたのである。従つて勢中國の故事や歴史的知識が豊富になつたわけである。私はこの書の引用を考へる時には、大意・起句・聯句・結句・韻字や索引などは餘り讀まれなかつたものと考へ、太字を以て記した所謂百科事典を想はしめる敘事・事實の部分より引用を求むべきであらうと思ふ。特に單語を前者に出典を求むることは當を失するものと思ふ。この點を注意しないと、總ての出典がこの書にあるやうで、過當に評価することになると思ふ。従つてこの小論でもその取扱をすることにした。

詩人玉屑。二十卷。宋の魏慶之の撰。南宋の詩家を中心とした詩話を集め、加ふるに自己の意見を述べたものである。宋代の詩論はこの書によりて概見することが出来る。内容は詩辨・詩法・詩評・句法・口決・命意・造語など五十六部門に分つてゐる。五山版もあつて五山の詩僧たちに愛讀せられ、江戸時代に入つては寛文以來版行多く流布した書である。芭蕉もこの書の影響を多く受けてをり、蕪村の愛讀したことも偶然ではないと思ふ。

白氏文集。七十一卷。別に白氏長慶集とも呼ばれる。唐の白居易の詩文集である。我が国では『文選』と併稱して『選集』と呼ばれて、古くから親しまれ、最も國文學に大きな影響を與へた書物である。平易流暢で諷誦に適し、情性に基き、人情に卑近であつたために、讀み易く理解し易く、我が國人の氣風に投じたものである。『和漢朗詠集』にも最も多く取られてゐることは先に述べた通りである。蕪村の引用についても多い書である。

陶淵明集。八卷または十卷。淵明名は潜、五柳先生と號

し、謚を靖節居士と云ふ。家貧のため彭澤の令となつたが、「我豈=五斗米ノ爲=腰ヲ屈シテ、郷里ノ小兒=向ハンヤ」と云ひ、歸去來の辭を作つて郷に歸り、再び仕へなかつた。晩年田園に隱遁し、酒を娛しみ菊を愛し、悠悠自適して生涯を終つた。その高風清節は六朝第一と稱せられる。詩は隱逸を旨とし、自然を尊び酒を樂しみ、田園を愛した作が多く、清遠質朴で飄々たる逸氣に溢れてゐる。中國に於ても多くの詩人が彼を師としたが、特に日本人の尊崇するところもなつた。また彼の生活や詩は南臺の題材として好んで用ひられた。江戸の刊本としては、寛文四年に菊池東弼の校點した十卷本がある。尙ほ文や詩は『蒙求』・『古文眞寶』・『圓機活法』にも多く採られてゐる。

杜律集解。六卷。杜甫の五言律詩・七言律詩のみを取つて編纂したものである。五言四卷、七言二卷である。明の邵傳字は夢弼の撰で、彼の万曆十五年の序が付いてゐる。江戸時代にはこの書が非常に愛讀せられたらしく、杜甫は一般に『杜工部集』から理解せられたものではなかつたやうである。勿論蕪村も彼の古詩や絶句も多く承知してゐたわけであるが、これは『古文眞寶』・『唐詩選』・『聯珠詩格』・『詩人玉屑』などに依つて知つたやうに思はれるのである。これは芭蕉においても同様のことが云へるのである。この書の江戸時代の刊本は誠に多く、寛永・万治・寛文・貞享・元禄と相繼いで刊行せられた。またこの書の注釋の適切簡明であることも特色であらう。

莊子。莊周の著。古くは五十二篇あつたが、郭象が刪改して、現存本は三十三卷三十三篇である。即ち内篇七・外篇十五・雜篇十一・爲音一である。内篇の七篇は逍遙遊・齊物論・養生主・人間世・徳充符・大宗師・應帝王で最も古く、莊周の真意を傳へたもので、外雜篇は莊周の徒の著作が混入してゐると考へられてゐる。蕪村の引用も内篇が多い。俳諧の世界では莊子は特に尊重せられ、西山宗因は莊子の像に讚して、「抑々俳諧は雜體のそのひとつにして、歌の寓言ならし。莊周が文章にならひ、守武が餘風を仰がざらんや」と云ひ、談林派では俳諧は莊子の寓言に通ふものであるとせられて以來、芭蕉を始めとして、俳人の必讀の書であつたやうである。

十八史略。二卷。宋末元初の人曾先之の撰。『史記』・『漢書』より宋史に至る十八の史書を鈔略したものであるから『十八史略』と云ふ。歴史的事實を中心として、格言・成語、俚諺・風謠に及ぶまで、學徒君子の必須の知識を網羅してゐるために、廣く讀まれた書である。各藩校はこれを教科書として用ひ、田舎の寺小屋に至るまでこれに倣つて履修し

た。即ち専門の學者ならざる一般の人士は、この書を読んで支那史の概要を把握し、故事・成語も學んだのである。

蒙求。三卷。唐の李瀚の撰。經史中の名士の言行の相類似する人物を取り、兩者を比較して四字句の韻語の標題を設け、童蒙勉學上の資となさんとしたもので、江戸時代に於ては『唐詩選』・『十八史略』と並んで、最も盛行を見た書の一である。特に漢・晉時代の人物が多く、江戸時代の人士が常識として、中國古代の名士の言行を理解してゐたのは『圓機活法』・『十八史略』とこの書より得たものらしく、直接『史記』・『漢書』以下の史書を讀んだものではなかったやうに思ふ。従つて蕪村に於ける漢文學の引用・出典を考へる時、彼の具體的な背景はこれらの書に於つたと思はれる。注釋家はこの點十分注意を要するのではないかと思ふ。

論語。二十篇。孔子及びその門人たちの言行を記録した書であつて、儒教の最高の經典である。江戸時代は儒教全盛の時代であつて、一般人の教養として、また道德の最高の權威として廣く讀まれたものである。

孟子。七篇。十四卷。論語と併讀せられる書である。『大學』・『中庸』と四書と稱せられるが、蕪村はこれらの書には大して興味がなかつたやうである。孟子の引用は認められるので讀んだことは明かであらう。朱子學一尊の時代であるから、恐らく朱子の集註本が藏せられてゐたと思はれる。この書は『論語』に似て孟子とその門人の言行、或は討論を筆記したものである。

詩經。單に『詩』とも云ふ。孔子が殷より春秋に至る間の詩三千餘篇を刪つて三百餘篇とし、孔子の道德教育の教科書として用ひたものである。五經中蕪村の關心を持ったものはこの書程度のものであつたと思はれる。

これらの書以外にも、『書經』・『易經』・『新撰朗詠集』・『冷齋詩話』などに僅かの引用が認められる。

終りに正岡子規の俳句と漢詩との關係についての論を聴きたいと思ふ。

俳句と和歌と漢詩と形を異にして趣を同じうす。中にも俳句と漢詩と殊に似たる處多きは、俳句が力を漢詩に藉りしにも因るべきか。芭蕉は杜甫の詩を讀みて其の趣味を俳句に移し、蕪村は詩の趣味と共に詩の言葉をも俳句に用ひたり。然るに漢詩を解する者往往にして俳句を解せざる者あり。こは俳句を見るに漢詩を見るの標準を用ひざる故なり。余も久しく漢詩を見るの標準を誤りしが、一旦俳句と漢詩と二致あるに非るを悟るや、疑團氷

解して始めて漢詩の真相を認め得たる心地す。俳句に於ける余の標準の誤らざる限りは漢詩に於る標準も亦誤らざるを信ず。俳句解すべからずとなす者、亦俳句を見ること詩を見るが如くせば容易に之を解し得べし。(俳句と漢詩)

これは子規の俳句觀であり、また漢詩觀でもある。誠に興味有る議論であつて、蕪村の句と漢詩の關係を理解のためにも、簡にして要を得た本質論である。

芭蕉と蕪村は共に相似た漢詩文の書籍を讀み、多くの漢文學を俳句に攝取してゐるのであるが、その方法にかなりの相違が認められるのである。この點については稿を改めて論じたいと思ふのであるが、芭蕉と蕪村の立場の相違を物語るものであると考へられるのである。芭蕉の具體的引用については、拙著『芭蕉と中國文學』を参照していただければ幸である。

(昭和42年9月10日受理)

補 遺

- 花にくれぬ我住む京に歸去來
陶淵明の歸去來辭に、歸去來兮。田園將蕪。云々。(古文眞實 前出)
- 春さめや菜めしにさます蝶の夢
莊子の齊物論に、昔者莊周。夢爲胡蝶。云々。(前出)
- 柳にもやどり木はあり柳下惠
列女傳に、玉石墜泥不爲汗。柳下覆寒女不爲亂。
- 月になく嗚呼現在の父戀し
白樂天の慈烏夜啼に、慈烏失其母。啞啞吐哀音。晝夜不飛去。經年守故林。夜夜夜半啼。聞者爲沾襟。聲中如告訴。未盡反哺心。(古文眞實)
- 鳥盡てかくるゝ弓か三日月
十八史略の西漢太祖高皇帝の六年に、韓信曰。果若人言。狡兔死良狗烹。飛鳥盡良弓藏。敵國破謀臣亡。天下已定。臣固當烹
- 麥刈て遠山見せよ窓の前
白樂天の井底引銀瓶に、嬋娟兩鬢秋翼蟬。宛轉雙蛾遠山色。